



# filizエッセイ 集



さぬきほっち

## filizのページについて

---

### これまでのfilizのページの歩み

filizのページの始まりは、2002年5月。数ヶ月の準備期間を経て12日にグランドオープンしました。

当時大学生、そして結婚1年目、持病とのつきあいも1年目だった私は、同じような境遇の人とネットを通して意見交換などができたら良いなあと願い、パソコン操作の練習も兼ねてこのページを始めました。その頃の状況は、キセイ・シンセカイ、どうして結婚したの？そして病気のこと、やまひ君によく表れていると思います。

そしてだんだんと、丸森町ひっぽに行ってきました、イギリスに行ってきましたなどの「行ってきました」もの、E・Nはお姉ちゃん、そして魔女の喫茶店などの創作もの、湯葉を作ろう、梅ジュースをつくろう、さぬきほっち さぬきうどんを語る、ほっちメニューなどのお料理もの、これらと関わってレシピや本の紹介ものを書くようになりました。

大学（学部）の卒業と前後して、filizのページ及び「うち、ムスリムやねん」の位置づけが変化してきました。

もっぱら「さぬきにつき」を利用するようになり、2010年、研究に関する内容を別サイトにしたこともあって、サイトをなくしてしまおうかと考えたこともありました。それでもやっぱり、日々充実して暮らしてゆくことの一つの方法として、自分を表現していく場としての、filizのサイトは、続けていこうと決めました。

そこで、2011年初夏、べんきょうの意味も込めて独自ドメインを取得。

「生活を楽しむ！」というコンセプトのもと、ますます趣味に特化して新たに出発しました。それに伴い、旧filizのページです。のサイトの内容を、この「filizのエッセイ集」にまとめました。

ありがとうございました。

どうぞ、今後ともよろしくおつきあい下さい。

さぬきほっち

<http://filizin.com/>

## 旧さぬきにつき

---

filizのページが始まる1ヶ月前から始まっている日記。

日記サービスに移行するまでサイト上で書いていました。

## 旧さぬきにつき

6月6日(木) 決意

治療を受けようと決意する。

昨日はいろいろな思いが出てきて落ち込んだりもしたが、やはり挑戦してみよう。

料理やそのほかのことに気をつけてきたのも、そのまま続けていこう。

何より、私は障害児教育教員養成の病弱教育コースの学生だ。

もし将来教員になって、もし生徒が病気の治療について迷ったりしたとき、私はなんて言えるだろうかと考えた。

「こわいから逃げた。」「いろいろややこしそうだから避けた。」

今治療を受けないとすれば、どんなに言いつくろっても本心はそうだ。

副作用のことも当然あるから、理性の部分がないわけでもないが……。

やはりやってみよう。

不都合があれば止めればいいのか。止められるものだし。

6月5日(水) 病院

最近調子が悪いので思い切ってかかりつけの病院に相談の電話を入れる。この前検査をしてもらったが結果を聞かずじまいでいたこともあり、病院に行くことに。

検査結果は、子宮内膜症がある場合増えるという物質の値が、基準値の5倍だった。一年半前に検査したときは、基準値を1、下回っていた。それから、子宮と子宮の外側が癒着している可能性があるらしい。だからひきつって痛いのだろう、ということだった。医師から、治療をしたほうがいいですよ、といわれる。いろいろと説明を受けた。「病理と保健」の講義で習ったばかりの言葉がどんどん出てきた。医師が「ゴナド……」と言ったところで「ゴナドトロピン……」とつぶやいてしまい、「よく知っているね」と言われた。「テストがあったばかりなので……」……なんてテストの話をしている場合ではなかった。従来あった治療法を説明された上で、現在使われている方法を話してもらおう。副作用もまだまじらしい。治療の区切りは一応6ヶ月。

複雑な気分だった。

夜、主人に話す。「はっきりしてよかったじゃないか。治療してみたらどうだ」と言われた。

．．．

5月30日(木) オムニキン

大学のスポーツ実技で、ニュースポーツのオムニキンをした。どでかいビーチボールみたいなボールで、4人ずつチームになって、「オムニキン、〇〇(チーム名)！」と言ってからぼーんとボールを挙げる。言われたチームが取りに行く。落としたりしたらそのチーム以外に得点が入る。

プレー風景はのどかだが、実際にやってみるとかなりハード。でもおもしろかった。

5月29日(水) しんどーいー日

近頃ちょっと体調が悪くて、ぐったりきている。でもスポーツ実技の単位は落とせないので頑張る。

ハンドボールで先週に引き続きキャッチャーをする。

それは良かったのだがもうふらふら。

夜、なんとか夕食を作って、お風呂に入って主人を待つ。と思ったら寝ていた。

主人帰宅、夕食後、また寝る。

だいぶ元気になった。

これからの夏に向けて、体調を整えていかなければ。

学校以外でも何か運動しなきゃなー。

5月28日(火) 写生

図画工作の講義で写生をする。私の絵のタイトルは「扇階段とC-5棟」。

ありふれたキャンパス風景だが、コンテで描くとなんとなく格好がいい。

一生懸命描いた。自画自賛そのまんまだが、気に入った。

絵はあんまり得意じゃないと思っていたのだが、

この講義を受けて、だんだんおもしろくなってきた。

ちょっとうれしい。

5月26日(日) イチゴ狩り

楽しかったー。大きなトラブルもなく、スムーズにいけた。

パートナーさんと自然な感じで親しくなれたとおもう。

イチゴはとても甘かった！帰宅して主人と一緒にヨーグルトをつけて食べる。

満足満足。

5月25日(土) 今週も忙しかった

今週もなんだかんだと忙しく、睡眠不足になった。

楽しいこともあった。

明日は、知的障害のある方々と交流するサークルに飛び入り参加させてもらって

イチゴ狩りに行く予定。

5月22日(水) ゴキブリが焼けてしまっていた事件

料理をしようとして、ガスコンロのところをふと見ると、ゴキブリが黒焦げになってひっくり返っていた。ゴキブリとはいえ、なんだか気の毒な感じがした。どうして逃げられなかったのだろう。

5月21日(火) 講演会

遠かった。さすがに講義の後で疲れていたのできつかった。

しかしやはり有意義な内容だった。

行ってよかった。

5月20日(月) レポート

大学に行っている間中、まだ落ち込む。

すこしでも元気になろうと、ぶっかけさぬきうどんが夕食。

早くできたのでお風呂に入っている間も、やっぱり落ち込む。

今日は怒って帰りが遅いかな（今までそんなことはないが）

なんて思った瞬間に主人が帰宅。

さぬきうどんを気に入ってくれる。

本場のさぬきうどんの説明をする。

明日のLD・ADHDに関する講演会に行くかどうか迷っていると、

主人がちゃんと行くようにと私を説得。その後レポートをやっていると、

本の内容をPCに打ち直すための音読をしてくれたので早く終わった。

5月19日(日) 図書館へ、そして・・・

レポートのため、近くの中央図書館に行く。時間があまりなく、

レポート用以外の本はゆっくり選べずじまい。

そのあと、3週間ぶりにケンカしてしまう。あー。

おさまって、とにかくもっとトルコ語を真面目に勉強せよ、という結論に。

5月17日(金) いそがしい一週間

今週は、レポートやら小テストやらに追いまくられて、

前のめりになんとかやり過ごしたという感じがある。

ホームページを作ったばかりなのに！！

5月12日(日) ホームページオープン！！

ようやくホームページをオープンできた。お祝いメッセージをもらえて嬉しかった。

夕方、主人と近くのイタリア料理店で食事をする。

きちんと作っているなあという感じを受けたし、おいしかった。

器もよかった。特に和風サラダは本当に和風にこだわっていて、

いろいろな種類の和野菜が入っていた。グラタンのホワイトソースのなかには

生クリームが入っていて、すごくこくがあった。

5月11日(土)

貯めてしまっていたレポートと小テストに追われた一週間だった。

そしてまたテストとレポートだ。早めにやろう。

夕食は「たましい元気なみそいため」だ。

食べ残しのフランスパンをバターをつけてトーストした。ラスクだ！そんなことよりフランス語のテストだ……。

5月5日(日)

無事帰宅。5月のY県は最高だった。いろいろなところに連れて行ってもらった。

しばらく会っていなかった友だちにも会えた。

5月2日(木)

友だちとピアノ練習室で、ピアノの練習とコールユーブンゲンの練習。俄然やる気になった。将来に向けてちょっとずつ進めていくことを決意。バイエルは実家にあるので送ってもらうとして、ハノンを買った。

明日からY件に帰省。

4月30日(火)

朝どうしても起きられず時間がなくなり、主人に迷惑をかけてしまった。

大学で、突然の休講にぶち当たる。情報処理の講義だったので、どうせならと、情報処理センターに行ってPCをいじる。

夜、ケーキを「仲直りに」と買ってきてくれた。二つも。しかも、最近見てないような、かなりおしゃれなケーキだった。感激した。二つとも一気に食べてしまった。主人は微笑みながらずっと見ていた。

4月29日(月)

ケンカしてしまう。かなしかった。さびしかった。長引いてしまった。長引くときは大抵私が悪

いとき。どうしてなんだろう。

すごく体調が悪かった。そういう時に限ってケンカしてしまう。

4月27日(土)

主人につれられて、アジア図書館というところに、タイのチェンマイ大学の日本語教育についての講演会を聞きに行く。私には全然知らないことだらけだったが、講師も話の進め方がうまく、興味深く聞いた。

4月25日(木)

大学で手話を学ぶ会に参加。キュードを使ったらうまいねといってもらえた。でも、手話や指文字もきちんとできるようになりたい。

4月24日(水)

久しぶりにアルバイトだった。楽しかった。

4月23日(火)

昨日、外国語コミュニケーションの先生に、TOEIC受験のための独学に最適なテキストは何かきく。

言いながら「by myself」を強調しすぎのような気がしてきた。講義でやってほしいという風に解釈されたら困ると思ったからなのだが。メールでもう一度同じ事を書いて、と言われたとき、「Please E-mail me.」と言われたことに驚く。動詞化してる!?

4月22日(月)

友だちに名刺を渡す。堅い紙なので点字は全然つづれない。

昨日頑張りすぎてしんどい。

4月21日(日)

サポートプログラムボランティア養成講座に参加。分かりやすかった。帰りに本屋で本を探したが、

なかった。参加者の一人の方とお昼をご一緒して、名刺も渡す。緊張した。慣れないもので・・・。

4月20日(土)

プリンターを買う。

明日誰かに渡すべく、名刺に名前の部分だけ点字を打つ。

4月19日(金)

今週は、図書館で借りた「ロードオブザリング」の原作「指輪物語」をずっと読んでいた。とに

かく続きが知りたくてどんどん読んでいったのだが、ただ冒険や戦いだけじゃなくて美しい描写も多くあり、今度はじっくり読んでいこうと思う。

4月18日（木）

時間割が出そろおう。外国語コミュニケーションも大丈夫だった。来年度教育実習の書類を書く。点訳作業のためのデータが届く。はやくメンバーに送らなければ。

4月17日（水）

スポーツ実技のシャトルランで疲れた。走った直後に激痛が来て、少し経つと治った。これは若いということか？その後バイトに行った。少々きつかった。

4月16日（火）

講義の抽選に受かる。ほっとした。でもまだ外国語コミュニケーションは分からない。小専（小学校専門科目）図画工作の講義は面白かった。「絵を描くことは、本来人間にとって一番原始的な表現方法であったはずだ。もっと自由に絵を描こう」絵、というと上手く描かなきゃ、と思ってしまうけれど。友達と、点字絵本について話したことがあった。私は一度切り絵みたいなものを利用して挑戦してみたことがあるが、こんどプッチングリーンでやってみようかな。

4月15日（月） 受講制限があり、時間割計画変更。4限の外国語コミュニケーションも、明日の2コマもまだ不安定。

4月13日（土）

点訳ボランティアで点訳予定の本、本屋さんに注文していた分が届く。  
いよいよ作業開始だ。

大学の時間割を清書する。

プッチングリーンで（ボランティアの芽 参照ください）点字の五十音、数字、アルファベットを表にする。

さわって分かるようになるのはいつだろう・・・。

分かる人は、指二本でさわって二行同時に読むらしい。それがどんな世界か知りたい。

冬物衣服の片付け完了。

4月12日（金）

言語障害関連の講義二連発。だけどすごく興味深い講義。

お昼休みに、独学していた数学の、2週間ぐらい悩んでいた問題がすっと解ける。ちょっと感動

。週末はパン食なので、いつものパン屋でいつもの「田舎食パン」を買う。  
スープを作っていたところで主人が帰宅。チョコレートのお土産をくれた。  
夜、ホームページ作成作業。

4月11日（木）

大学の前期講義が始まる。

昨年後期から復学したので、一つ下の回生の講義を受けることがほとんど。

同期の友だちとも離れ離れで、しばらくはどっちつかずの寂しい思いをした。

でもようやく、一つ下の回生の仲間とも少しずつだが友だちになることができてきた。

結婚していることもオープンにしている。

これからもっとたくさんの人と友だちになるぞ！

帰り道、最近新しい人と出会って知り合いになることが多いので、

名刺を作ろうと思いつき、注文する。

大学食堂でみた「なにわうどん」のアイデアを夕食に使う。主人には好評だった。

## 丸森町ひっぼ（筆甫）に行ってきました

---

夫が学生時代、海外植林ボランティアをしていた時に知り合った友人の方が、今宮城でお味噌をつくっているという話をききました。その、「山の農場&みそ工房SOYA」さんにお味噌を注文したら、ものすごくおいしい。それで我が家のお味噌はずっとSOYAの「山里ひっぼのげんきなみそ」になりました。

どういうところで、どういう風に作っているのかなあと気になっていたのですが、忙しくてなかなか行くことができず、とうとうもうすぐ一年という時になって、チャンスが巡ってきたというわけです。

途中の車窓から、新潟のひろいひろい田んぼを見ることができました。私も周りが田んぼや畑、山山という環境で育ってきたのですが、あんなにひろい田んぼを見たのは初めてでした。

阿武隈急行に乗って「丸森」へ。主人の友人Oさんの奥様が迎えにきてくれました。緑のトンネルと呼ばれている、そばを川が流れる山の中の道を通り、ひっぼへ。

SOYAの大豆畑の下手の方に味噌倉とOさん宅がありました。まず味噌倉を見せてもらったのですが、大きな木の樽がたくさん！小さな樽に小分けして出荷するそうです。小さな樽に入ったお味噌を見せてもらいましたが（大きな樽の方は見えません、はしごで登らない限り）迫力がありました。おいしそうでした。Oさんの奥様に、味噌倉での作業についてお話をききました。仕込んでからの「天地返し」は、樽が大きくて普通にはできないので、樽から樽へ移し変えるそうです。小さい樽の中にはいって、一寸法師みたいな感じで、わっせわっせと味噌を移すのだそうです。

次に大豆畑に行きました。畑の周りに電気を通す線が張ってあって、いのしし予防だそうです。でも、地面に足がついていない昆虫は大丈夫だということで、トンボがたくさんとまっていました。私は最初またぐのがちょっと怖かったのですが、もしあたっても鞭で打たれたような痛みを感じる程度だそうです。

午後からは畑の草抜きの手伝いをさせてもらいました。農薬を使っていないので草との競争だそうです。Oさんと二人で畝を行ったり来たり順番に抜いていきました。二人の距離が近くなるとお話ができるので、作業をしながらいろいろなお話をききました。「どうしてお味噌をされるようになったのですか」という私の質問には、最初から味噌と決めていたわけじゃなくて、いろいろ考えたなかでまず大豆が出てきて、それから味噌になったそうです。味噌だけじゃなくて他の大豆の加工品ももっとやりたいそうです。（現在もSOYAの商品は味噌だけじゃなくて、たまり醤油や炒り豆を加工した黒糖豆、味噌豆などがあります）なぜ大豆なのかというと、大豆はエネルギー効率が良いそうです。私たちが作業をした広い大豆畑で、もし牛を飼おうとしたら、一頭しか飼えないそうです。でも大豆なら畑の牛肉といわれるほど、たんぱく質などの栄養価

も高いし、それだけたくさんの人を養えるというわけです。

夜に、Oさん、奥さん、1歳のむすこさんの一家団欒の中で、いろいろとお話をききました。むすこさんのこと、ひっぽのこと……。ひっぽは今、どんどん人が少なくなっているそうです。Oさんは、志があってひっぽに入ってきた方ですが、他にもそういう方がいるそうです。

Oさん宅は涼しくて、とてもきもちよくねむることができました。

翌日、午前中は私はむすこさんといっしょに散歩をして、お二人は仕事をされていましたが、午後から、駅まで送っていただくついでに、Oさんのご友人を訪ねていきました。散歩をしたとき、道に落ちている梅の実が、いい香りをさせていました。

最初に行ったのは藍染め工房でした。そこのご主人も、あとから来られた方だそうです。「藍の花」や、布が染まる所を見せてもらいました。次は角田の蓮池 だったのですが、残念ながら台風の影響で今年は駄目になってしまったということでした。最後に陶芸をされている窯の所へ行きました。SOYAの豆ガラ の灰を使ったというやきものもを見せてもらいました。みなさん極められているというか、自分の道はこれだと決めて歩いていらっしゃるようで、すごいなあと思いました。

私もまだまだだけれど、自分なりに考えて、行動していこうと思いました。

## きのうよりワクワクしてきた

---

2005年4月17日

今日、国立民族学博物館は特別展示館に於いて、ナビゲーター 光島貴之さん（美術家）、協力ミュージアム・アクセス・ビューというグループによる、「見えない人と見える人の展覧会 散歩」に行ってきた。特別展の内容は、「きのうよりワクワクしてきた。 ブリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち」。この特別展自体は、6月まで行われているので、あまり内容に触れるのは良くないと思うが、（私の言葉で表現させてもらおうと）シュールだった。

視覚障害のある方お一人と、ミュージアムパートナーの方、そして私の3人のグループで回ったのだが、あの展示の強烈な世界にのみこまれ、3人とも「何これ？」「なんでこれがここにあるの？」の連続。見えたものをちゃんと説明しなくちゃいけないとか、そんな気負いや肩肘張りは通用しない世界。「何これ？」「分からないーっ！上のほうがフワフワしていて、ピンク色で……」

「冷蔵庫の中に……ウッ、なんで？」始終こんな調子。

展示の中身も、障害のある人の作った作品と、作家の作った作品と、博物館の所蔵品、そしてゴミが、ごっちゃごちゃに並列でひとつの世界を構築していたのだが、逆に変な垣根が無くてよかったと思う。

まさに、きのうよりワクワクしてきた。

ブリコラージュって、きっちり用意して何かを作るのではなく、ありあわせの物で何とか作り上げてみるという、そんな感じのことらしいのだが、まさに、私の料理とか、物事の成し方もほとんど、そうかも知れないなあと思う。

私は美術とか、そういうのは苦手と思っていたが、かなり、かなり楽しめた。また私は、日常の、普通の風景の中にふっと見つかるおもしろさとか、微笑ましさとか、シュールさとか、ちょっとしたズレみたいなものが大好きなのだが、今回はその塊みたいな世界で、最高におもしろかった。

2005年12月6日

夕食の準備をしていたら、ふと思ったことがあった。

昨今、いわば「ひとことギャク」のようなお笑いがはやっている気がする。嫌いだというわけではない。むしろそういう、カチッと型のあるお笑いも好きだ。しかしそんな、「お笑いの時短化傾向」のある中で、2時間超という時間を使って笑かそうとする、そういう試みを続けようとしている、それってすごいことなんじゃないかなあと、ふと思ったのだ。

何のことを指しているかという、と、「ザ・プラン9／The Plan9」という集団の、本公演のことだ。詳しく説明するほど知らないが、全員が以前漫才のコンビを組んでいて、かつそのコンビの解散を経験した5人組であるという。「演劇よりもおもしろく、コントよりもドラマチック」などという、紹介に使われるキャッチコピーがあるが、その表現には収めきれないものがあると思う。

私が初めて拝見した舞台は、第6回本公演、「Hey!」だった。そのアンケートに、「構音障害の演技がすごいと思いました。」と書いたのを憶えている。当時、大学で障害児教育を学んでいて、言語障害の講義を受けている真っ最中だった私は、そんな自分にも、虚構性を感じさせない演技に本気で驚いたのだった。そしてたくさん笑わかされると同時に、ツーンと目頭を刺激されもした。

次の舞台、第一回公演「ブルース」の再演は自分にとってさらに強烈だった。一番印象に残ったのは演出だった。三次元のパズルのような「台詞のクロス」を初めて体験した。もちろんそれには脚本のすごさもあると分かった。そしてこのお話にも、知的障害のある中学生の男の子が登場していた。30歳の男性が演じているとは思えなかった。

そして、カーテンコールでのメンバーのトークが、やたらとおもしろいなあと感じた。さすが「お笑い」の人たちだと思った。

しかし、彼らの舞台を観るようになってから、少しずつ気がついてきたのは、今まで私は、普段は「お笑い」の仕事をしている人たちの「演劇」、として観ていたが、そんな「粋」にあてはまらないのではないかということだった。

さっきふと思ったのは、それは私の大好きな、「落語」に似ているということだ。落語も長い。その長いお話の中に、滑稽なところもあり、しみりするところあり、ピリリとするところありで進み、最後にオチがつく。

彼らの舞台を観て、こんなのお笑いじゃない、などと万が一、思う人がいれば（私にとっては相当笑わかされるが）、落語を思い起こしてもらおうと良い。一から十まで笑うところしかないお話がお笑いの全てではないと思うのだ。

そしてこれは、私の完全な憶測だが、「お笑い」って、人間に興味のある人のする芸術の一つ

だと思う。芸術にもいろいろあって、他の人間に理解されるとか そういうことを（一見）気にしてないのではないかなあと思えるものもある。本当はそうじゃなくて、ただ私の受け止め方の問題かも知れないが。だが「お笑い」は、もろに他の人間に向けたものだ。それを観る人間がいて、かつ何らかの反応（笑うとか、しらけるとか）があることも含めての営みだ。

なんだかふと、それってすごいなあと思った。

多かれ少なかれ皆そうだと思うが、私は自分が人間に興味があるとすごく自覚している方だ。私は、だから障害児教育の道を志して今までやってきた。そしてお笑いもすごく好きだ。それは、いろいろあるけれども、なんだかんだ言って最終的にはやっぱり人間が好きだ、という心持ちの部分で、似たものを（勝手にかも知れないが）感じるからかなあと思う。

もうすぐ、ザ・プラン9の18回目の本公演がある。シンプルに、楽しみだと思う。

## ミュシャ展に行ってきました

---

2006年1月15日

しよっちさんと「ミュシャ展」に行ってきました。

現在のチェコ共和国のモラヴィアで生まれた、アール・ヌーヴォー様式の代表である人とのこと。美術のことはよく知らないけれど、そんな私にでも十分興味深い内容でした。一番すごいと思ったのが、上の階の華やかで、人の目を引く作品たちと、下の階に展示されていた作品の一部の、「商品」ではない絵や、パステル画たちの対比性でした。同じ年代の上の階の絵を思い起こすと、ほんと、「ええーっ?!こんなん描いてたん?」と思うほど。

それから、デザインのテキストみたいな本用の図の習作のデッサンの細かくて丁寧で、きちんとしていること!基本がしっかりしていることが、独創の羽を羽ばたかせる要だと痛感しました。

本の挿絵のために描かれたある絵たちは、黒炭だけが使われているのが印象的でした。

あと、何と言っても<スラブ叙事詩>です。6X8メートルが20点ですよ?!もちろん、実物は無理なので、習作を観ました。モラフスキー・クルムロフ城に観に行きたいと切に思いました。

19世紀から20世紀への世紀の変わり目にちょうど活躍されていることもあって、(ミュシャが初めて制作したポスター<ジスモンダ>は1894年、私が上と下の階を比べてうわーと思った作品群がちょうど1900年ごろ、その後アメリカ時代を経て故郷に戻る)芸術も歴史を映すんだなと感じました。

21世紀のはじめに生きるものとして、1900年周辺のことをもっと学ばないといけない気がしてきました。

# イギリスに行ってきました～カレッジの小石～1

全ては突然に決まった。

2004年の春休み、私は、イギリス・オクスフォードにいる友人に、会いに行けることになった。

いろいろな意味で、イギリスへは、ずっと以前から行きたいと思っていた。自分がいつか留学したいと思って、ずっと興味を持っていたし、友人がオクスフォードへ旅だった後には、ぜひまた会いたい、会いに行きたいと思っていた。また、オクスフォード大学は、イギリス最古の大学として知られるが、そこは、私の大学での指導教授が留学したところでもあった。

願っていたことが、叶うときは、こんなに早いものかと思った。いろいろなことがあって、突然、私は行くことになったのだった。

旅の目的は、友人に会いに行くこと。まずはこれが第一だった。それから、指導教授の知り合いの方に面会してもらうこと、イギリスの（オクスフォードにある）公文教室を見学することも加わった。出発前の諸々の用事は、夢のような感覚のまま、それでもなんとか済ませた。そしてあっという間に旅立つ日が来た。3月8日、私は空港へと向かった。

夫とは、途中の駅で別れた。今回の旅のことを、最初に言い出したのは彼で、いっしょに行けないことをとても残念に思った。寂しさを通り越し、悲しいと思った。空港行きの電車の車内で、目の前に広がる海にはっとした。良いお天気だった。「天気が良い」ということを、こんなに味わったのは久しぶりの気がした。

修学旅行以来、たった二度目の海外旅行だったので、出発が近づけば近づくほど、不安が募るようになっていた。大学生協の格安チケットで、マレーシア航空で行くことにした。席がいっぱいで、行き道はマレーシアで一泊することになった。マレーシアに行き、泊まるということは、全く予期していなかったことで、手続きなどをちゃんとこなせるか不安だった。そもそも、空港の手続きすら、心もとないものがあった。それでも、旅の最良かつ唯一の準備は、アッラーへの畏怖である、という言葉思い出して、心が静まった。

空港に着くと、母と弟が見送りに来てくれていた。ちょっと遅れていたのでも、二人に会うとすぐ、私は手続きに走り回った。後は手荷物検査や出入国審査だけということになって、ほっと一息、みんなでお茶を飲んだ。

母が、「マレーシアに着いたら食べなさい」と、小さな水筒とお弁当箱を渡してくれた。すでに手荷物はパンパンだったが、なんだか断われず、素直に受け取った。

後から振りかえると、あの水筒とお弁当箱ほどありがたいものは無かったと思う。

すぐに時間が経ち、だんだん感傷的になっていく気持ちを抑えて、手荷物検査などの手続きへと向かった。一度入ると戻って来れない入り口だ。「ここからは私しか入れないんだよ。」と母に言った。母は、私が乗る飛行機を見たいと言って、バスに乗ろうかどうしようかなどとしきりに繰り返していた。

母と弟が見送ってくれる中、私は入り口に入っていった。ヒジャーブでの海外旅行も始めてだったが、手続きはすべてすんなり終わった。「無事、日本の外に出ましたよっ！」嬉しくなって、私はさっき別れたばかりの母と、夫に電話をかけた。

空港の待合室で座っていると、どこからか、不思議な、それでいて絶対聞き覚えのある音が聞こえてきた。

ふ～し～ぎ～ いっぱい

ふ～し～ぎ～ いっぱい

ん？まさか！これは！と、不必要なくらい驚いてしまったが、その音は、NHKの教育番組のオープニングテーマソングだった。「こんなところでお耳にかかれるなんて、あんたのほうだよっ！不思議だよ。」と一人テレビの方角につこんでしまった。

マレーシア行きということもあってか、少しずつ、まわりにヒジャーブ姿の人が増えてきた。最初私は、それが嬉しくて嬉しくて、つい手を振ったり、微笑みかけたりしてしまった。後でよく考えると、相手にしてみれば、空港で、全く面識の無い人間にそんなことをされたのだから、かなりビビッただろう。申し訳無かったと思う。ムスリムになりたての頃からの癖なのだ。特にあの頃は、自分がヒジャーブをしていなかったから、見かけた相手とあいさつの一つでもしようと思えば、自分から声をかけるしかなかった。それで、知り合いの輪が広がったこともあるから、大目にみてほしい

と思う。（誰に大目に見てほしいのかは分からない。）

前に座っていた人が、係員の人と何か話していた。英語で話しているようだが、どうも通じあっていないらしかった。しばらくして、係りの人が私に向って、「スペイン語話せますか？」と尋ねてきた。私は、すぐさま「話せません。すみません。」と言った。語学学習は好きなほうだが、スペイン語は「オラ！」ぐらいしか知らない。それだけでは全く役に立たないのは明らかだった。

こんな、小さなできごとを、こまごまと旅行日記の手帳に記していたら、搭乗の時間になった。妙に緊張してきた。私は必死で、修学旅行の場面を思い出そうとした。そうだ、電車の改札みたいな機械にチケットを通すんだ。一生懸命をしばらくしながらも、表面上はすっかり旅慣れているように見え（たらしいなと思っ）た。事務的な会話以外、結構長い時間、誰とも話さなかったの、何だか変な気分だった。興奮やら、緊張やら、不安やら期待やらで、普段より断然、誰かと話したい時なのに、ぐっと押し黙るしかない。心の中で言葉がぐるぐるまわっていた。手帳があつて、本当に良かったと思った。

ビジネスクラスなどの搭乗が済み、エコノミークラスの番になった。私はかなり先頭の方だった。改札みたいな機械の前でチケットを渡すと、係りの人が、何やら引き剥がし始めた。なんと私は、バゲージ・リクレーム用のシールを、こともあろうにチケットの、「回収されてしまう方の半券」に貼り付けてしまっていたのだ。係りの人は手馴れた感じでそれを取ってしまうと、スキャンした「回収されない方」といっしょに、手をネバネバさせながら返してくれた。私の、「表面上すっかり旅慣れた感じ」も、一瞬にしてはがれ落ちたかのようだった。端から、全くもって笑い話だった。

通路を通過して飛行機の中に入ろうとすると、実にたくさんの人が、いろいろな仕事についているのが見えた。すごいなあと思っていると、あつという間に、もう機内になっていた。大勢の乗務員の人が、にこやかに挨拶してくれた。「こんにちは。」“Hello.” 係りの人は、相手によって英語と日本語を使い分けている。こちらとしては、係の人が大勢なので、何語で言えば良いものやら、少しまごついた。

すると突然何かが切り替わったように、マレー語らしき言葉で挨拶してもらった。一瞬のことで全然分からなかったが、振りかえると、少しおもしろい体験だと思った。

マレーシア航空を使つての、イギリスへの旅行で最初の難関、それはマレーシアへの「着陸」だった。

どうでもいいことだが、私は飛行機に乗っている時の中で、着陸する時が一番苦手である。それには一応理由がある。

あれは修学旅行の時だった。日本に帰って来た時に、珍しいことが起こったのだ。その時はだいぶ気流が荒れ模様で、着陸以前の高度を下げる段階ですでに何か、「無理矢理感」が乗っていて感じられた。がんばってがんばって下げている、という感じである。そしてそのまま、飛行機は着陸態勢に入った。窓の外の景色が、だんだん下がっていく。ものすごいスピードを急に実感する。ついに地面が見える。地面、地面、地面、まだ着陸しない。地面…地面…海。えっ、海？落ちる！！

と思った瞬間、ガクンと傾きが反転し、飛行機は下りるのをやめ、再び飛びたっていた。ものすごい角度がついた状態のまま、荷物が滑っている音を聞いた。座席に張りつけられている状態のまま、しばらくは声が出なかった。それから、あれよあれよと言う間に、飛行機は元来た道に戻り始めた。「着陸のやり直し」である。

それから、30分くらい経って、飛行機は再び着陸態勢に入った。その間、シートベルトサインは点灯し続け、乗務員さんも全く姿を見せなかった。どうしてもお手洗いに行きたくなった同級生が何人か、相談をしに行ったくらいである。揺れて揺れて大変な状況の中、大変怖い思いをしたということだった。そして二度目は、「無理矢理感」が前より増しつつも、着陸ができたのだった。

あの時の、一瞬「えっ、海？」と思った感覚は、忘れられない。

そんなこんながあつて、着陸は苦手なのだった。今回も、高度はすごく高いし、「気流が荒れている」とか何とか言う、アナウンスもあつたので、どうなるのだろうと思った。

案の定、ものすごく揺れて、ビュンビュンと映画みたいに飛んでいるイメージが自分では浮かんだ。そしてある程度下がった時点で、今度は急に耳が痛くなった。全員ではないようだったが、周りにも耳を押さえて「何、これ…」と痛がっている人が大勢いた。私はその時、焦ってしまって、耳から空気を抜こうとしたり、余計なことをしたせいかさらに痛くなった。激痛である。こんなに耳が痛いまま旅行を続けるのかと思うとゾーッとした。顔が熱くなって汗もかいた。そんな状態が15分くらい続くと、さすがに客室内はシーンと静かになった。

飛行機は時々、エレベータのように垂直に下りているみたいな高度の下げ方をしながら、着実に降りていく。静かなので余計、揺れている感覚が気になる。必死で我慢、我慢だった。下がるたびに雲が切れていき、緑がいっぱいの、はじめてのマレーシアの景色が見え始めた。素適な風景を楽しむ余裕はあまりなかったが、それでも嬉しさ、ワクワク感が胸がいっぱいになった。

それからさらに15分くらい経って、飛行機は無事、マレーシアの地上に降り立った。半分フラフラしながら、今とはにかく揺れていないことが幸せとばかり、私もさっそく歩き始めた。気がつくとも耳の痛いのが、嘘のように消えていた。

飛行機から空港に移ってすぐ、結構湿気があると感じた。それに、暖かだった。3月・早春の日本から来たのでギャップが激しいのだ。手に持っているモコモコのコートがやけに違和感を醸している気がしてきた。でも、自分はこんなに長い旅行をしたんだなあと思うと、すごいなあ、と思えた。だが、明日もまた飛行機に乗るんだぞ、と思いつくとため息をついてしまった。

チケットの都合で、マレーシアに一泊するので、入国の手続きをして、荷物を受け取った。標識のサインが分かりやすく良かった。夕飯には少し早いぐらいの微妙な時間帯で、これからどうしようかと考えた。飛行機ですごく疲れたし、とりあえず落ちつきたいと思ったので、すぐにホテルに行くことにした。

ホテルに行くのが一苦労だった。空港のすぐ近くのホテルで、送迎バスもあるということで決めたのだが、バスの乗るポイントがはっきりしなかったのだ。いや、本当ははっきりしていたのだが、私が一人不安になってしまったのだった。

一応、この階だと思われるところに行き、ご丁寧にホテルの案内の人にまで尋ねたのに、すぐにバスが来ないので妙に不安になった。30分に1本来ると教えてもらって、外は暑いから、涼しい中で待てば良いのに気になって何度も外へ出てしまう。この不安はどこから来るのだろうと考えてみると、それは、言葉の不安からだった。

マレーシアに無事着き、イギリスへのマレーシア航空での旅の往路が半分終わった。空港の近くのホテルで一泊した。そして翌日、いよいよイギリスへ向かった。だが、私にとってその経験は、単なる乗り継ぎ経験以上の、記憶にとめるべきものになった。

空港からのバスを降り、受付でチェックインを済ませると、さっそく部屋に案内してもらった。そのホテルは、平屋で、小さな家がたくさん集まったようなおもしろい建物だった。たくさんの通路を通って、とうとう、私が使わせてもらう部屋を教えてもらった。

そこは、とても広い部屋だった。床はタイル張り、セミダブル、ひょっとしてダブルサイズかも知れない大きなベッド、書き物机に、ミニ冷蔵庫やテレビのある家具、そして、ほとんど別室のような感じの広い洗面所とシャワールーム。うすい緑色を基調にまとめられた、さっぱりした部屋だ。隅に荷物を置くと、急にポツンと自分が小さくなった気がした。小さい頃から、いろいろな人に泊めてもらう経験が多かった私だが、たった一人で旅館やホテルに泊まる経験はそれまで無かった。自分でもよく分からない感情が、こみあげてくるのを感じたが、ひとまず夕食を済ませることにした。

案内された通路を逆に辿り、食堂へ向かった。日はすっかり落ちて、雨音やにおいや、空気の中で、梅雨が思い起された。

食堂はとても広い感じがした。夕飯時には少し早くて、人が少なかったからかも知れない。お客も、航空会社関係らしい人たちが多く、とてもビジネスな感じがした。私はドキドキしながら、受付の人のところに行った。念のため、食事の材料について先に聞いておこうと思ったのだ。係の人は、てきぱきと答え、そのまま席へ案内もしてくれた。

「大丈夫です、もちろんハラールです、私もムスリムですし。」そう請け合ってくれた後、係の人はこう付け加えた。「あなたはムスリム？どこから来たんですか？」「そうです、日本から来ました。」「あなたは日本人ムスリムなんですね。なるほど…」それから少しの間、お互い微笑みあった。

旅行に出て、はじめてちょっと人間味のあるコミュニケーションができたなあ、と思いながら、席に着いて食事をどうしようか考えはじめた。ビュッフェ形式か、普通に注文する形式があると言われ、少々考えた後、普通に注文することにした。しかし、これが大きなミスだった。料理の中身や量が全然分からないのに、確かめないで注文してしまったのだ。

結局、自分にとって辛すぎる料理を含め、やたらと大量になってしまった。途中で一度、係の人が本当にこれで良いのかと聞いてくれたのに、まったく暢気に「はい」と言ってしまう、最後のチャンスも逃した。それでも、あまりにも申し訳無いことをしたと思ったので、鼻水も涙も流しながらできるだけ食べた。最終的に、「すみません、注文の仕方を間違えてしまいました、これ以上食べられません。」と正直に言いに行った。すると係の人は、「大丈夫。」と言って、一旦お料理をさげると、保存用パックに詰めて持ってきてくれた。私の無計画性のせいでこんなことになったのに、やさしい心遣いがとてもありがたかった。丁寧に感謝を伝え、保存用パックの入った袋を手に提げて、部屋に戻った。

部屋に帰ると、前よりもひどく、どうしようもないような感情がこみあげてきた。それで、あわてて日本にいる夫に電話をかけたが、途中で切れてしまう。国際電話カードを使うのだが、まずホテルの交換手を通すので、カード番号をすどい早口で言わないといけない。何度かそんなやりとりを繰り返し、何とか電話を終えると、もうダメだった。

さびしい。何とも言いようの無い、強烈な孤独感に襲われた。ここには、私の知っている人は誰もいないし、誰も私のことを知らない。ここに、私がいようが、いまいが、全然違いは無い。さびしくてさびしくて、私は声を出して泣き始めた。何が何だか分からなくなった。わあわあ泣きながら、ふと、飛行機に乗る前にお母さんが持たせてくれた包みを見つけた。私はまだわあわあ言いながら、ピンク色の、お弁当包みを開けた。中にはとても小さなお弁当箱があり、2種類のご飯が入っていた。「飛行機に乗っている時間が長いから、もつかなあ。」と母が言っていたのが思い出されたが、そして私も一瞬、これは大丈夫か？と思ったが、一口食べてみた。つやつやの白米と、ゆかりのシソの、シンプルな風味が、口の中に広がった。米の粒をひとつひとつつまむような勢いで、ゆっくりゆっくり箸を運び、ゆっくりゆっくり噛むうちに、だんだん落ちついてきた。

そう、私は、今イギリスにいる、あの人に会いに行くんだ。その人に会うために、私は日本を出発したんだ。何が何だか分からなくなって、ばらばらになった感情が、少しずつ、元の位置に戻っていく感じがした。その小さなお弁当を食べ終わる頃には、かなり元気が戻っていた。これは、帰ってから、お母さんにお礼を言わないとな、と思いながら、ちょっといそいそと、部屋の写真を撮ったりした。

サラートをする時、部屋の天井に緑の矢印があって、キブラの方向が分かるのがとても良かった。その必要は無いのだが、嬉しくて、わざわざその矢印の真下にセティングした。サラートをして、その場所にしばらく座っていると、一番落ちついて、リラックスできた。どこにいても、この空間は普遍だなあと思った。同じように座って、つらかったり、悩んでいたことについてドゥアをした、いろいろな時、場面の思い出がふとよみがえってきた。そうしていると、もう、今いる部屋に対してよそよそしい感じがなくなり、親しみのある感じになった。

朝になると、疲れもとれ、また元気満々になっていた。サラートをしてから食堂でさっと朝食を取り、飛行機の時間に合わせて早々にホテルを出発した。空港へのバスでの道中は快適だった。キャリーバッグの取っ手の不具合も起こらず、ホテルの人にありがとう、さようならの言葉を伝えて、ワクワクしながら空港に入って行った。今日は、いよいよイギリスへ行くのだ。

マレーシアからイギリスへの便は、マレーシア航空だったが、バージン・アトランティックの機体が使われていた。客席は、日本ーマレーシア間とは違ってかわって、かなりガラガラだった。乗客も、日本人らしき人々の数もぐっと減って、イギリスとかヨーロッパ系らしき人々が増えた。係の人も、機内放送も、マレー語と英語だけの世界になった。乗客の少なさからか、係の人が何となくラフな感じになったようで、私も何となくリラックス度が増した気がした。

突然、男性の係員の方がマレー語らしき感じで話しかけてきた。私は全然分からなくて、また「私はマレー語が話せません。」と英語で言った。すると相手は「は？」みたいな感じで2秒ほどポーズがあった。その後、どこの国とか、ムスリムとか、ひとしきりそんな問答を英語で交わした。その係の人は日本人の中にムスリムがいるということによほど驚いたらしい。日本のムスリム事情をいろいろ尋ねてきた。当然、その人は飛行機の係の人なので、仕事があるのだが、合間を見て何度か質問しに来た。私は、この旅でその後何度も口に出すことになる、「Japanese Muslim」という言葉を、自分で認識しながら初めて口にした。少し誇らしかった。

バージン・アトランティックの機体の設備は新しくて、一人一人にテレビ画面がついていた。それを操作するリモコンは、マルチな感じで、いろいろな用途に使えるようなボタンがたくさんついていた。その中の一つ、人の形のマークに目

がとまった。何だろう、これ？と思って試しに押してみると、数秒もしないうちに「マダム？」と係の人に声をかけられた。しかも、映画に出てくる支配人みたいな人が来てくれたのだった。（こ、こんな気楽な感じの人のマークは、呼び出しボタンだったのかあ！？）と思って青ざめたが、とりあえず「トイレはどこでしょうか。」と質問してみた。私の指は、まだ人の形ボタンを押したままの状態であまり固まっていて、いかにもあやしい感じだったが、その人は親切に教えてくれた。実際、いつもトイレの場所が分からなくて（トイレなのにトイレと認識できなくて）四苦八苦していたので、少しは有意義な質問だったかなと思った。

もう一つ驚いたことは、乗客の行動だった。日本ーマレーシア間では、日本人らしき人々が多く、飛行機に乗るとまずするのは、ガイドブックか雑誌をひらくか、仲間とおしゃべりすることだった。だが、今回は、乗客の行動のナンバー1は、読書だった。日本ーマレーシア間と比べてやたら静かに感じるくらい読書率が高かった。本型のガイドというわけでもなく、本当に読書にふけている感じなのだ。

乗客の人が、係の人に何か言って、席を動くケースが増えた。何だろうと思っていたら、ジュースか何かを持ってきてくれた係の人が、「今は離陸するから駄目だけど、安定したら、こんなに空いているから、スタッフに声をかけて、好きなところに行って、寝転がっても良いですよ。」と、すごい提案をしてくれた。私はベジタリアンミールの注文をしているので、どこに行ったのか分からなくなると困るからだ。

時差の関係で、マレーシアを出るとすぐ「就寝タイム」になった。私は、係の人の言葉どおりにして、ゆったり足を伸ばして眠ることができた。飛行機が激しく上下する時もあったけれど、寝ている方が衝撃を感じにくいような気がした。眠れるだけ眠ってしまうと、どうしても起きたくなってきたので起きた。機内はまだ暗いままだし、機内食の時間も遠そうだったので、ここぞとばかりに例のマルチなりモコンでファミコン・ゲームをした。子どもの頃、家にはファミコンが無かった。でもなくてよかったと今では思っている。というのは、私はそういうものにのめりこみやすい性質なので、もしあったら大変なことになっていただろうと思うからだ。ある時、もらい物か借り物か何かで、家にファミコンや「ゲームボーイ」があった時期があったのだが、その時にそう悟った。それでも、飛行機の中で一度やりたかったのでもやってみたのだ。時間はどんどん経つし、ゲームの技もどンドンうまくなるのだが、やはり最終的には、私にはこういう物は無くて良いなと思った。

その後、機内が若干明るくなり、少し窓の覆いを開けてもいい状況になってきたので、外の空を見始めた。雲と空しかない景色だったが、いろいろなことを考えた。光が、とてもきれいだった。

そしてとうとう、着陸に向けて飛行機が高度を下げ始めた。少しずつ、少しずつイギリスの山と街並みが見えてきた。見える景色の全体が、とてつもなく大きな港みたいに見えることもあった。田園地帯みたいな感じの風景が、ゆっくりゆっくり近づき、ここはどこだろうと思っているうちに、着陸態勢に入りそうな感じになってきた。

私はまた耳が痛くなることを心配し始めた。でも、耳抜きはやめた。係の人が、プシューと、何かスプレーを上部の荷物入れに向けて噴射していた。その正体は未だ不明だが、私はその時、それが耳痛防止スプレーなのではと思い、心もち鼻をひくひくさせたりしてみた。そして、その、「何だ？ここ？」みたいに思っていた田園地帯風のところに、飛行機が降下し始め、えーっと思っているうちに着陸した。耳は全然痛くならなかった。

そしてそこが、ヒースロー空港だった。

とうとう、イギリスのヒースロー空港に到着できた私だが、内心、不安でいっぱいになっていた。翌日から、結構いろいろな予定が決まっていたし、それはわくわくと楽しみに思えることでもあり、また本当に自分にできるのだろうかとか萎縮してしまいそうなことでもあった。灰色の通路を、落ちつき無く歩いた。

入国審査でさっそくひっかった。後から思えば、私の英語の理解力と、相手の語彙のバランスが悪くて、やたらと話が長くなったということなのだが、その時はかなり焦った。このまま入国できなかつたら、今まで苦労してきたことも無駄になるし、何より友人にも会えなくなる。それでは困ると、急に闘志が湧きあがった。だんだん、顔が真っ赤になってくるのが自分でも分かったが、頭をフル回転させて主張しまくった。後から考えるとそこまでするか〜？というくらい、虚勢を張ったと思う。

相手の方がどう思われたか分からないが、とりあえず何とか入国できた。そして両替をしようとしたら、またしても自

分にずっこけてしまうことが起こった。私が、一生懸命英語で両替をお願いしたら、係の人はなんと日本人だったのである。さりと日本語で返事をしてもらって、がっくりきてしまった。なんて間抜けなんだろう！

しかし、この二つのできごとのおかげで、私の不安はすっかり消えていた。36℃のマレーシアから、真冬のイギリスへ飛んできたにも関わらず、体はかっか と熱くなり、頬はほてり、心は燃えていた。「負けない！」…と、何に負けないのか分からないが、とにかく元気がいっぱいになっていた。さあ、友人に電話しよう！と思ったが、プリペイド式国際電話カードを使う関係で、最初にイギリスの国番号が必要だった。あれ、何だったっけ？事前にいろいろな情報をメモした手帳にもそれは書いていない。何でこんな基本的なことが分からないんだ？とまた、自分にあきれながら、その国際電話カードのイギリス窓口へ（フリーダイヤルであったこともあり）電話をかけた。「あの～、このカードって、携帯電話へもかけられますか？」と、普通の質問をしつつ（本当に確かめたかった）、 ちゃっかりイギリスの国番号もきいた。係の人は、ものすごく親切に回答して下さり、しかも「どうぞまたご遠慮なく何でもお尋ね下さい」と付け加えてもらって、とても嬉しくなった。

そしてめでたく、友人と連絡が取れ、少し経ってから、再会を果すことができた。

あの、出口近くの白いコン コースのあたりの人ごみ、荷物に注意するよう呼びかける放送の声、近くのショップのライトなどなど、立体の写真のように今でも思い出せる。出迎える人々 待っている人々、歓声、そして目の前の友達の姿。その時私はやっと、ああ自分はちゃんと、イギリスに来れたのだと思えた。それは、長い長い今回の旅の「往路」の終わりであり、「オクスフォード旅行」の始まりであった。

オクスフォードへはバスで約1時間だった。さっそくバス乗り場へ向かった。

待っている間、かなり迷ったが、「スパークリング」のミネラルウォーターを買った。シンプルな自動販売機で、1ポンドだった。ヨーロッパ等には、天然の炭酸入りの、もちろん甘くない、ミネラルウォーターがあるという話をきいて、一度飲んでみたいと思いつけていたのだ。「これだ！」と思って、買った。ところが、私としては、あまりおいしいと思えなかった。でも、試すことができてよかったと思う。

このように、わたしのオクスフォード旅行では、それまでずっと持ち続けていたさまざまな、ちょっとした願いや大切にしてきた夢が、叶うことが多かった。それは、友人のご厚意によるところがかなり大きい。オクスフォードに発つ前、日本で連絡を取り合っていた時、友人が、「ここで何かしたいことはない？」と訊いてくれた。私はもともと、友人に会えればそれだけで十分だと考えていた。

しかしオクスフォード行きが決まると、幸運なことに、大学の先生に会ったり、公文教室に行ったりする予定も加わった。もうそれで十分すぎるくらいだという私に、友人は、せっかくだからもっとやってみたいことはないかと、本当に親切に提案してくれたのだ。

私はそこで、3つ挙げた。一つは、オクスフォードで一番高い場所に昇ること。一つは、公園でサンドイッチを食べること（天気の良い日に）。最後の一つは、小石を拾うこと。こんなことは、どうでもいいことで、簡単に叶いそうなことかも知れない。しかし私は、どうしてもこれらのことをやってみたかったし、実際、なかなかどうして、遂行困難なことだった。

それでも結局、後に素晴らしい形で実現したのだった。もちろん、ヒースローのバス乗り場で待っている時は、その遂行がどんなに難しいかということも、まだ知らなかった。

バスが来るという直前で、私は急に焦りだした。友人がバスの乗り方を教えてくれたのだが、それがちゃんとできるかと、ドキドキしてきたのだ。まだイギリスのお金の感覚も全然分かっていないし、運転手さんとのやりとりもある。

一般的に、バスの料金は、乗るときに支払う。大きく分けて「One Way」と「Return」の二つがある。私は帰りにまた乗るので、「'One ' return to Oxford city centre, please.」と言わなくてはいけないのだが、1枚の「one」と、片道の「one way」が何だかややこしくて、ちゃんと伝わるように言えるのか、すごく緊張してきた。

### (Oxford) City Centreへ

ヒースロー空港のバス乗り場で、city centre行きのバスに乗り、ガチガチに緊張しながらも、何とかチケットを購入できた。二人がけ（長距離なので）のシートにおさまると、バスが動き出した。

オクスフォードへの道のりはとても短く感じられた。友人とは長い間会えなかったもので、ききたい話、話したいことが途切れることはなかった。途切れないのに、窓から見える景色に思わず「わ～！」「うお～！」となり、二日間飛行機に乗ってきたことも何のその、頭がフル回転だった。何に「わ～！」「うお～！」だったかという、何とんでも、家、その他の建物の外観が日本とは全然違うのだ。山や畑などの風景も、私は大好きなのだが、この建物の感じの違いは強烈な印象だった。私、イギリスに来たんだ、という実感がはっきり湧いた。

耳も目も全開の状態のまま、バスはcity centreに到着した。そこは遠くから来たバス用のターミナルだったので、普通路線用のバス停群のあるところへ移動する必要がある。雨が降った後らしく、道路は若干湿った感じだった。歩道は石が並べられてできていて、非常に風情があった。見回すと、その辺りにある全ての建物に年季が感じられ、趣のある外観に惹きつけられ、まずどれを見たものか迷うほどだった。それでいて、親しみも感じられる、不思議な場所だった。

### Sainsbury

友人のお宅へ行く前に、買い物をすることになった。City centreの中心的な通りに面している、Sainsburyというスーパー。空港の免税店などで、徹底的に「見てるだけ」だった私は、俄然元気になって、早速自分でも買い物をしてみることにした。

まだ値段の感覚を完全にはつかめていなかったのだが、このSainsburyのお店をくまなく見て回ったことで、「金銭感覚のお勉強」が進んだと思う。結局、私はこのお店がすっかり気に入って、友人に「良いですね、このお店、こりゃいいですよほんと。」と感想を述べた。

イギリスと日本の商品で、私が発見した一番の違いは、「Suitable for Vegetarian」（ベジタリアンの人にも適応）の表示、または緑色の葉っぱがVの形に重なったマークがあることだ。これがあることで、結果的にハラール・ハラームが一発で判断できるのだ。たとえば、お菓子など、一見大丈夫そうで、たまにどちらか迷うようなものも、イギリスのこのシステムでは即判断がつく。

私の大好物となった「フィンガー」というお菓子や、ボリュームたっぷりのジャム入りクッキーなどの他に、日本でいう「〇〇の素」のようなもの、例えばグレービーソースの素などにも、Vマークがついていた。そう、グレービーソースの素にもベジタリアン用があるのだ！

もう一つの大きな発見は、牛乳の入れ物が、紙パックではなく（紙パックのものもあったような気がするが）、プラスチックのボトルで、持ち手がついていることだ。後で飲んでびっくりしたのだが、牛乳の味が濃い！ものすごく濃くておいしい。紅茶に入れると、日本のミルクティーとは、コクが全然違うのだ。これは、どこへ行っても感じたことだった。

さらに、100パーセントのオレンジジュース（紙パック入り）が他のものに比べて安いことに感激し、GREENという銘柄の、オーガニックらしいホワイトチョコレートを発見し、好物を手に入れた満足感でいっぱいになった。

レジは、一列に並んで待って、キャッシャーの番号が上にある表示機に点灯し、同時に自動アナウンスが流れるので、その番号のところへ行くという形だった。こんな形を経験したことがなかったので、順番にスピーチをするかのように緊張してしまった。番号が分からなかったらどうしようと思ったが、表示を見ればいいんだと自分を落ち着かせた。私の番になって、多少、動きがロボットのようになっていたような気がするが、一応、無事支払いを済ませた。

その後、Sainsburyを出て、歩道をはさんですぐ近くのバス停に向かった。もう暗くなっていたが、Sainsburyと同じ通りに、BORDERSという大きな書店があることを発見した。今度行ってみようと思った。

バスは、番号が決まっているので、番号さえしっかり確認すれば大丈夫だった。「あ、2番が来てる、これこれ！」ということで、旅行の荷物を持っているのもものともせず、ドタドタと走って乗り込んだ。

友人宅の近くのバス停へは、ほとんど一本道だった。日本のように、バス停の名前をアナウンスしてくれないから、景色を見て、ここだと判断してボタンを押さないといけないのだと、友人が説明してくれた。一度、間違えてボタンを押してしまった時は、責任を取ってそこで下り、そこから歩いたという話もしてくれた。私は、窓の外の景色をみて、一本道ということもあり、こんな全然分からないよ〜！と愕然とした。

私は、観光地を駆け足で見て回るような旅行は好きではない。今までの旅でもほとんどが、友だちに会いに行くのが目的で、そしてその場所での友だちの暮らしを、ちょっとだけでも、いっしょに過ごすことで体験させてもらってきたつもりだ。そんな旅が好きなのだ。

とうとうオクスフォードに着いた私は、ほんの短期間だがそこでの「暮らし」を始めた。

## 何でも数字錠

案内してもらった友人宅のある学生寮は、内部は普通のマンションのようにとっても快適だった。勿論、友人ご夫婦にあたたかく迎えて頂いたことが一番大きかっただろう。外のセキュリティはともしっかりしていた。さらに付属の自転車置き場にも洗濯室にも、至るところに数字錠があって、とても憶えきれないほどだった。銀色の、メタリックなボタンが縦に並んでいるタイプが多いのだが、すごく押し難くて、よくちゃんと押せたか不安になった。

## City Centreの朝市

翌日、前の日に「一本道で全然分かんないよ〜」と思った道を、友人といっしょにバスでcity centreまで下った。週に一度朝市があって、特に野菜が種類も豊富にしかも安く手に入るのが魅力的なのだ。早速、いろいろ見てまわり、ズッキーニやプラムを買った。他にお菓子などもたくさんあったし、衣類から日用品まで何でもそろった。

## 書店めぐり

その後、大きなところでは3つある書店をじっくり見て回った。一番歴史のあるBLACKWELL書店は、内装からして貫禄があった。手すりも床も階段も、ごつい感じの木製で、それが自然に光っているのだ。学生御用達ということもあって、専門書が非常に充実していた。ここでは心理学関係の本を読みあさった。

BORDERSでは、明るい感じの児童書コーナーと、ポストカードのコーナーが気に入った。児童書のコーナーには子ども用の朗読や子守唄等のCDなどもあった。日本では限られた場所で少しずつしか見ることのできないシリーズものもずらっと揃っていて、素敵な眺めだった。友人は用事があったのでここで一旦別れた。

もう一つの書店の名前は忘れてしまったが、一番都会的な感じだったと記憶している。他にもオクスファムのお店などを見て回り、BORDERSでポストカードを買った後、暮れかけるcity centreからゆっくり歩いて帰った。途中、小さな商店街みたいなのところがあった。Centreまで行かなくてもちょっとした買い物ならここでできるな、また後で来ようと思った。

夜には、翌日にお会いする予定の、私の指導教授が留学時代にお世話になったという方で、オクスフォード大学の心理学部の先生でいらっしゃる方にメールを書いたり、日本へあててポストカードを書いたりした。

## 自転車事情

翌日からの行動手段のメインは自転車だった。私は友人の前に使っていた自転車を貸してもらい、友人と二人で出かけることが多かった。

最初に驚いたのは、自転車に「自転車立て」が付いていないことだ。つまり、自立しないのだ。自転車を置こうと思ったら、必ず立てかけなければならない。また、盗まれることが多いらしく、チェーンは必須だった。そして、いわゆる「ママチャリ」タイプの自転車が無い！私はほとんどオクスフォードしか滞在しなかったのも他の地域のことは分からないが、全部いわゆるスポーツタイプなのである。

さらに、自転車は必ず車道を通らなければならない、必ず左側通行を守らなければならない。自動車がビュンビュン走っている道路を横切ってでも、左側通行を守らないといけないので、こわい時もあった。だが、たいていの自動車ドライバーは自転車に優しく、かなりの確率で譲ってくれたりするので、その点は日本より良かった。

## ランチをご一緒する

指導教授の留学時代のお知り合い、D博士とお会いする約束が確定し、彼女のいらっしゃる建物へと向かった。〇〇streetとか、△△roadとか、イギリスでは道が住所を構成している。友人といっしょに「ここらへんかな？」と言いながら探し、とうとう見つかった。遠いイギリスの地で「ここらへんかな？」という曖昧さがまた乙なものだった。博士と会えた時点で友人とは一旦別れた。

私は緊張でガチガチになって、御土産の説明もしどろもどろになった。それでも何とか最初の挨拶は無事終わり、なんとランチをご一緒できることになった。彼女のいらっしゃった建物は、学部の建物で、簡単な食事を取れる休憩スペースがついていたのだ。職員や学生でなければそんな場所を使えないはずなので、記念になるし、大変光栄に思った。

スカーフを付けていたので一目瞭然かとは思ったが、食べられないもののことで失礼なことになってはいけないと思い、一応伏線として「ベジタリアンです。」と言っておいた。ポテトのサラダセットみたいなのがあったのでそれにしたかったのだが、売り切れだったのでツナサラダのみにした。博士は「ツナは良いの？」と心配して下さった。

休憩スペースには、自動の紅茶・コーヒーマシンがあった。たとえば紅茶だったら、最初にポン！と、紙コップにティーバッグが出てきて、ティーバッグをセットし、お湯を注いで熱々の紅茶ができるのだ。「これは便利ですねえ！」と盛り上がった。その熱々の紅茶をすすりながら、博士といっしょにランチを頂いた。私はずっと緊張しっぱなしで、英語もかなりおかしいことになっていたと思う。だが博士は、心理学の質問の時など、分からない単語は紙にいちいち書いて下さったり、大変親切にして下さった。本当に貴重な、良い経験をさせてもらったと感謝している。

## ボードリアン図書館

次なる予定は、ボードリアン図書館で、私の図書館IDを作ってもらったことだった。友人が勉強している間、私も勉強させてもらうようにだった。そのためにまず、友人と待ち合わせている場所まで行かなくてはならない。博士のいた建物を出発し、City Centreまでまた自転車に乗って出発だった。

途中分かれ道で、どっちだろう？と思ったが、ええい、こっちだ～！と左に曲がって走り出した。たった2日前に来たばかりのオクスフォードの街だが、前日に歩いて帰ったりしたこともあって、かなり馴染みがでてきていた。よそ者という感じがあまりしない、あたたかい街だと思った。

友人と無事おちあうことができ、ボードリアン図書館に行く途中で、「あれっ？」と、いわゆるデジャヴュを感じた。後から判明したことだが、ボードリアン図書館の歴史の重みを感じる門が、「ハリー・ポッター」の映画で出てきたのだった。

そこの辺りで、友人に入学式の話をしてもらった。制服着用の義務があり、年齢が上の学校ほど、だんだん丈が長くなるのだが、なぜか袖が退化してしまって今ではヒラヒラのリボンみたいな飾りになってしまったそうだ。だからどんなに長くても、ガウンというより「ベスト」なのだった。後で実物を見せてもらったが、「袖が退化」したという表現がぴったりでおもしろかった。

ボードリアン図書館では、オクスフォードにある全ての図書館で使えるIDを一括で作ってくれる。少し料金がかかるが、使用期間によって違ってくる。私は大学の図書館と、指導教授より、推薦状を頂いてきていたのでそれを見せると、資格は十分ということでひとまず安心した。

だが、そこからが大変だった。まず、休みに入る前の中途半端な期間で、今はIDを作れないと

言われた。それでもすぐに帰らなければならない旅行者ということアピールして、何とか作ってもらえるはこびになった。次に、主に使用する図書館を言わなくてははいけなかった。私は友人がよく利用する「サックラー図書館」と言ったのだが、「なぜ？」と言われて言葉につまってしまった。友人の専門と私の専門は違うので、友人の専門の関係文献がたくさんあるサックラー図書館では不自然な感じだったらしい。

私は、「障害のことが出てくる神話があるときいたので、実際に見てみたいのです。」と言いたかったのだが、「神話」の英語が分からない。取調べのような雰囲気、完全にパニックになってしまい、あわやもう駄目かと思ったところへ、離れたところにいた友人が偶然私のところへ来てくれた。そこで、「すみません、こういうことを言いたいんですけど通訳してください」と頼んで、友人にスラスラとお話ししてもらったら、係りの人はすぐにOKを出してくれた。

利用の誓約みたいなものを（しかも各国語に翻訳されていた）読み上げ、写真を撮ってもらった後、料金を払って、とうとうIDカードをもらうことができた。「もっともっと英語を勉強しなきゃ駄目ですね、さっきは本当にありがとうございました。」と言うと、友人は、「あその係りの人たちって、とてもきれいな英語だったけど、話すのはなんで？と思うくらい速かったから大変だったよね。」と慰めてくれた。

## ストラトフォード・アポン・エイボンの旅

オクスフォードから列車で1時間とちょっとくらいのところに、シェークスピアの故郷、ストラトフォード・アポン・エイボンがある。この「アポン・エイボン」というのは、ストラトフォードという地名が他にもたくさんあるから、区別するためについているらしい。

できごとの起こった順番としては少し前後するが、先にストラトフォードのことを書こうと思う。

オクスフォードでシェークスピアの劇『冬物語』を観た私は、日本に帰る前にぜひストラトフォード・アポン・エイボンに行こうと決め、日帰りの小旅行をすることにしたのだった。

オクスフォードの列車の駅（普段はバスをよく利用しているので）に、バスで向かう途中、隣の席の人に「このバスは駅にいきますよね？」と尋ねたことから会話が弾み、とうとう駅の中まで案内してもらった。

その人にお礼を言って別れ、無事に切符も買って、どきどきしながら列車に乗り込んだ。

ちゃんと駅名が聞き取れるだろうか？乗り換えはちゃんとできるか？

駅名も、乗り換えの駅で降りるのも何とかできたのだが、しかし、別のもっと深刻な問題が起こった。私は自分のヒアリングの力の方をまっさきに疑った。つまり、ストラトフォードへの途中で事故があり、私が乗り換えのために降りた駅、レイミントン・スパ駅以遠は列車の運行が止まっています、というアナウンスが、そこでは流れていたのだ！！他の乗客の人が、えーっという感じで駅を出て行く。私も当然、えーっ！だ。どうすんねんどうすんねん。帰る？それはいやだ。事実より自分を疑っていたかった私は、そんなことはないですよー、というつもりで駅員さんにきいた。しかし、列車のトラブルは本当だった。「だからタクシーで行ってください」と駅員さんは言う。タクシー？どうやって乗るんだ～！お金かかりそうだし！2回ぐらい説明して

もらってようやく決心がつき、駅を出た。

外に出ると、駅員さんがタクシーに列車の乗客らしき人々を案内している。これは、手配してくれているということか？私が外に出るのが遅かったので、人々の行動にばらつきがあって、判断するのは難しかった。

と、おそらくお母さんと娘という組み合わせの、いかにも旅行者らしい二人が、駅員さんにタクシーを案内されている光景が見えた。

そこで、猛烈に勇気をふりしぼってひとこと。Can I go as well?

‘as well’というのは、オクスフォード滞在中、「～も」の‘too’の代わりによく使われていると発見していた表現。後から考えれば、ものすごく冒険をしたということになる。alsoとか、tooを使った表現の方が順当だとは思ったが、即座にバシッと伝わる方がいいと思ったのだ。応えは

Sure.かくして、私は先のお二方と相乗りしてストラトフォードに向かうことになった。

しかし、まだちょっとしたトラブルがあった。まっすぐストラトフォードに向かうはずのそのタクシー、途中で2ヶ所ぐらい別の場所に止まった。すごく不安になった。同乗しているお母さんらしき女性も同じだったらしく、「このタクシーはストラトフォード・アポン・エイボンに行きますよね？」と尋ねた。応えはイエスだったけど、その運転手さん、最初から若干不機嫌げみで、駅の手前で降ろすと言い出した。女性が、たくさん荷物があると主張しても、すごい剣幕でまくしたてる。しかも半分くらい別の言語でだ。

結局、かなり強引な感じで、ストラトフォード・アポン・エイボン駅に着く前に降ろされた。手配だったからお金はかからなかったけど、ちょっと嫌な気がした。

私はそこから駅への行き方が分からなくて、通行中の人にきくはめになった。英語の会話の練習では本当によく出てくるシチュエーションだけど、実際にやるのはすごく勇気が要るものと分かった。でも、ちゃんと教えてもらえた。その後駅に着き、帰りの列車の時刻を確認してから、泊めてもらっていた友人のうち一人へ電話で報告をした。イライラがたまっていた私は、多分人生で初めて、怒りながら英語を話すという芸当をやったのけた。

最後にとうとう、シェークスピアの生家や庭に行くことができた。帰りはトラブルは片付いて、全行程列車で帰った。終わってみれば楽しい小旅行だった。

この日まで、どこへ行くにも友人と共に過ごすことがほとんどで、何か困ったことがあると友人に助けられていた。甘えてしまっていた部分も多々あったと思う。でもこの日、母国語以外の言語環境で何とかやっていくということの、厳しさと楽しさ、責任とやりがいが、少し分かった。

### 「冬物語」の観劇

私の心の中には、いつかやってみたいことのリストが、言うなれば「あこがれリスト」がある。日本以外の場所で演劇を見ることも、その中の項目にある。以前、上海で「上海雑技団」の公演を観たことがあるが、その時の感動は相当のものだった。そして今回とうとう、イギリスで演劇を観ることが叶うことになった。

友人は、私がせっかくイギリスに来たのだからと、いろいろと心配りをしてくれた。演劇が大好きな私のために、観劇のスケジュールを組んでくれたのもそのひとつだ。友人が調べてくれた劇は、なんとシェイクスピアだった。「冬物語」というお話は知らなかったけれど、彼の故郷ストラトフォード・アポン・エイボンが近くにあるオクスフォードで、シェイクスピアのお芝居が観られるということだけで大興奮だった。珍しいテント（Mirror Tents /spiegel tents）の円形劇場で行われるということもあり、すぐそれに決めた。友人が電話で予約をしてくれた。そして、インターネットを使って「冬物語」のお話の予習をしておいた。

テントはオクスフォードのはずれにあった。当日はバスを2台乗り継ぎ、さらに歩いてようやくたどり着いた。初めて行くところだったので、バスの中でも、道でも、人にいろいろと尋ねた。だんだん時間が迫り、バス停とバス停の間をダッシュしたりして、少しハードだったが、ちょっとした小旅行のようで楽しかった。バスの中で、子どもが決して座らず、空いた席を見つけると他の人に教えてまわっていた光景が印象的だった。

結局、開演時間より少し遅れて到着した。見知らぬ場所で、「開演時間に遅れる」というイレギュラーなことをしてしまい、自分でも「どうなってしまおうだろうか？」と必要以上に心配がこみあげてきた。ところが、逆にラッキーだった。なんと、もう始まっているからと、チケットも確認されず、予約した席ではない、ものすごく前の方の、まさしく特等席に案内してもらったのだ。そこは舞台もすぐその、テーブル席で、ゆったり見ることができたし、幕間には軽くお食事を頂くこともできる席だった。もちろん、体験できることは全部やってみようという主義なので、私も嬉々として頂いた。舞台を見ながら飲み物をすすっていると、自分も登場人物になったような気がした。

ミラーテントと呼ばれるその円形劇場は、世界に11個しか現存していない珍しいもので、なんと百年も前に作られたものだそうだ。11個それぞれに大きさも仕様も違っていて、私たちが見たものは「Idolize」として知られているという。この話は、幕間に前の観客席の人と、パンフレットを見ながらお話しして知ったことだ。なぜミラーテントというかと言えば、うまく表現できないが、中にとにかくたくさんの鏡があり、宝箱のようなのだ。鏡やその他も含め、劇場自体がとても独特で、それ自体が一つの劇のようだった。

円形の舞台の上には、登場人物を象った人形が吊ってあり、それらは演出の面でうまく使われていた。演じるのは、人数としてはわりとこじんまりした劇団だった。一人何役もこなし、さらには楽器の演奏も全部自分たちでやってのけていたが、それが逆に良い雰囲気を出していた。何を言っているのかはさっぱり分からなかった。音としては入ってくるのだが、頭の中で意味とし

て全く結像してくれないのだ。予習をして行って本当に良かった。それでも、自分のできる範囲で十分楽しめたと思う。

終演後、外に出ると雨が上がっていた。劇の最中に降っていたようだ。最後にミラーテントの外観を鑑賞してから帰った。

### おいのり会に出る

オクスフォードには、街の中心部にイスラミックセンターという建物があって、その中で自由にお祈りができるようになっていた。これはかなり便利だった。買い物に来た途中でも、大学で講義を受けに来た途中でも、図書館に来た途中でも、手軽にすぐそこへ行けるのだ。文化センターの役割もあるそうで、パンフレットなどをもらった。

それとは別に、友人のムスリムの友人たちに会う機会もあった。週に一度、おいのり会と称して、みんなで集まり、話し合ったり、お祈りをしたりするという。そこに参加させてもらうために、まずその参加者の方のお宅におじゃまして、車で乗せていってもらうことになった。

友人を含め、留学している人のお宅を見せてもらったことは何度かあったが、イギリスに実際に住んでいる人のお宅は、その時が初めてだった。日本でも最近ガーデニングなどというが、まさしく本場イギリスの「お庭」があった。私の憧れの「暖炉」もあった。そういう「物」にも出会えて嬉しかったが、なんと言っても嬉しかったのは、イギリスのムスリマに会えたことだった。その方は、多分、1分間に60回くらい言っているのではないかと思うくらい、「Al hamdlillaah」を連発して話す方だった。娘さんは歌がとてもうまくて、車の中で歌ってくれた。ヒジャーブを外せば年頃の、いまどきの娘さんなのだろうが、ヒジャーブをつけた姿はまさしくムスリマだった。

おいのり会に出発する前に、そこのお宅で晩御飯をいただくことになった。トルコでおなじみの「ライスケーキ」だった。ご飯やお肉やお野菜を、大皿にケーキのようにかためて盛り付けるのだ。ご近所にいらっしゃる、もう一人の、おいのり会の参加者の方も呼んで、みんなでいただいた。とても楽しかった。

おいのり会で印象に残ったのは、おいのり会そのものも当然だが、一番は「おやつ」の量だった。そんなことを書くなんて、食い意地が張りすぎのようだが、本当にすごかったのだ。ケーキの上にアイスクリームが載っていて、それと紅茶を頂いたのだが、全部の量の多いこと、とても食べきれないと思ったが食べきれってしまったのがまた驚きだった。後片付けの時、台所に入らせてもらったが、そこもすべてがビックサイズだった。ただでさえ小柄な私は、こびとになった気がした。

帰りの車の中で、娘さんが歌ってくれた歌はずっと覚えている。そしてみんなで、イギリスの各地にある「訛り」についての話で盛り上がった。最後は英語だけじゃなくて、ドイツ語や他の言葉の話も混じってきて、おもしろくて楽しくて、笑いが止まらなかった。

私はときおり、日本でムスリムとしていることに、妙な孤独感をおぼえることがあった。でも不思議なことに、イギリスでイギリスのムスリマに会えた時、何かストーンと落ち着くものがあ

った。イギリスにはイギリスの、日本には日本のムスリムがいる、みんなそうやっている、いろいろな苦勞や楽しさもひっくるめて、それが普通なんだなあと思ったのだ。

オクスフォードが晴れた日

ある日、午前中に友人の用事が終わったら、昼からオクスフォードの「観光」をしよう、ということになった。その時点ですでに、何度も図書館へ行ったり、書店に入り浸ったり、水曜の朝市やスーパーSainsburyやC O・O Pで日用品の買出しをしたり、郵便局へ行ったり、カフェに入ったりとすっかり街に馴染んだ感覚だったが、一度「観光」もしてみたいと思った。前夜、イギリスに行ったら一度は食べてみたかった「フィッシュ アンド チップス」を友人と作っていた。その残った魚のフライを使い、サンドウィッチを作って自転車で出発した。途中、すっかりお馴染みのSainsburyで紙パックの「ブラック カラン ジュース」を買い、オクスフォードのカレッジ群の中へと向かった。

その日は、本当に本当に珍しく、晴れた。それまで、雪やら小雨やら霧雨やら、ありとあらゆる天気を味わってきたが、一日中すっきりと晴れたのは滞在中でこの日だけだったと思う。イギリス人は天気の話が好きというが、「そりゃ好きになるよな！」と納得できたほどだ。たまに晴れたとなると、嬉しくて嬉しくてつい話したくなるのだ。

実際私も、オクスフォード大学の博物館の近くで、ベンチに座ってサンドウィッチを食べた時に、通りがかりの人と「晴れましたねえ」「やっとなですねえ」というような会話を交わした。

サンドウィッチを食べていて、ふと気がついた。「そうだ、私、イギリスに来たら、公園のベンチに座ってサンドウィッチを食べてみたかったんです！それが今叶いました！」思わず友人に向かってそう言った。

「公園のベンチに座ってサンドウィッチを食べる」などと言うことは、日本の常識で考えると簡単に実現できるありきたりのことだ。でも、そうではなかった。そこには暗黙の内に、天気が「晴れ」という条件がついているのだ。私は、「Mr. BEAN」というコメディで、公園でサンドウィッチを食べるシーンを見たことがある。主人公ともう一人、合計大人が二人、嬉々として食べるのだ。何をそんなに嬉しそうなのかと思っていたが、「そりゃ嬉しくなるよな！」と思った。

きらきら、ぽかぽかした太陽の光の中、サンドウィッチを食べ終わると、しばし友人と別れた。友人が大学の用事をしている間、私は博物館に行った。はっきりとは分からなかったが、物理かその辺り、とにかく科学関係の博物館だった。

「アインシュタインが講義した黒板があるよ」と友人に言われていたので、まずそれを探した。下の階の、奥まったところにその黒板があった。「 $D = 1/C \quad 1/L \quad d l / d t \dots$ 」とまだまだ式が続いていた。アインシュタインが実際に書いた式を写すというのは夢みたいなことだったが、とにかくやってみたかったのでやった。今私の手元にあるメモには、その写した式のすぐ下に「relativity」と書いてあって、説明が走り書きされている。

博物館には他にも、古い望遠鏡など、由緒ありそうなものがたくさん展示してあった。オクスフォードというと、今では「文系」というイメージがあるが、この博物館を見た限りでは理系

の伝統も深そうだと思えた。

そうこうしているうちに友人とおちあう時間が来た。無事合流できると、「クライストチャーチ・カレッジ」に向かった。映画「ハリー・ポッター」シリーズの「大広間 (=Hall)」の撮影で有名でもあり、カレッジミュージアムでお土産が買えることもあり、そしてその近くの「セントメアリー教会」の塔が、オクスフォードで一番高いところということもあり、ここを観光しようということになったのだ。

途中で、「アリスの家」という『不思議の国のアリス』専門店があった。どうしてそんなものがあったのかというのは、後で分かった。とてもかわいい店内だった。品物もお土産にちょうど良い感じだったので、少し選んで購入した。

クライストチャーチの近くで写真を撮ってもらった。今回の旅行で唯一、自分の姿がある写真になった。初春の芝生の緑が鮮やかで、背景に歴史的な建物と、アーモンドの花々がきれいに映っている。友人の話だと、この近くにいつも牛がいるという。友人のイメージだと、「クライストチャーチ・カレッジ=牛がいる」だそうだった。

カレッジの入り口の直前で、小石を拾った。小石を拾った理由は、私の大学入試の時にさかのぼる。オープンキャンパスに参加した時、きっと合格して、必ずここへ戻って来ようという気持ちを込めて、小石を拾って帰った。「意志」と「石」をひっかけていることもある。めでたく合格して、その石は元のところへ返した。その後休学することになった時、また小石を拾って帰った。復学し、また石を戻した時の思いは格別だった。

私は、オクスフォードとは決めていないが、イギリスの大学院で勉強したいという目標がある。その、「いつかイギリスへ戻ってくる」意志を込めて、クライストチャーチ・カレッジの小石を拾ったのだ。

カレッジへは、在学生のゲストという形で、無料で入場することができた。芝生の広場を目にしたときも、「大広間」へ向かう階段でも、デジャヴュを何度も感じた。それはそうだった、映画で観たことがあったからだ。

実際の「大広間」は学生のための食堂だった。「本日のメニュー」と書いたボードがあって、「ポーチドサーモン」とか、「チキンとスイートコーンのパイ」などとおいしそうなメニューが並んでいた。また、大広間の中の高い壁には、数え切れないほどの肖像画が並んでいた。オクスフォード大学の長い歴史の中での教授たちの姿だった。

その中に、『不思議の国のアリス』の作者ルイス・キャロルもいた。ただし、「ルイス・キャロル」はペンネームだったので、最初は全然分からなかった。ガイドさんが教えてくれてやっと分かった。彼は物語の世界から抜け出してきたような、おしゃれな帽子を被っていた。大広間にある暖炉には、とても変わった、首の長い木の像が両脇にあるのだが、それを見てキャロルは物語のインスピレーションを得たという。またアリスちゃんは、実際にいた彼の娘だそうで、

「キャロルがここで食事を取っている時、アリスがここから入ってきて、出て行ったんですよ」などと教えてもらった。

今と昔、物語と現実の世界が入り混じるような複雑な空間を出ると、「オクスフォードで一番高いところ」へ上るために、セントメアリー教会へ向かった。行くとすぐに塔に登らせてもらえた。荷物を一部置いていくように言われたのだが、それもそのはず、上までは結構な道のりで、両手両足を使う必要がある場所もあったのだ。ぐるぐるぐるぐる螺旋階段を登り、はしごみたいなところも登り、どこまで行くのだろうと思ったところで、とうとう頂上に着いた。

すかっと、見事に晴れた青空が広がっていた。風が最高に心地よかった。最後に一枚残ったフィルムで、塔の上からみたオクスフォードの写真を撮った。街を背景に、クライストチャーチのどっしりとした建物と、日時計と、芝生と、そして青空が映っている。こんな景色はなかなかお目にかかれないであろう、まさしく「オクスフォードが晴れた日」になった。結局、旅行前に夢見た、公園でサンドウィッチを食べることも、小石を拾うことも、一番高いところに上ることも、そして思ってもみなかったことも全部叶ったのだった。

日本へ帰る日が来た。午前中、最後の買い物をした。行き慣れた書店では、劇を観た「冬物語」の本や、心理学の辞典などを買った。オクスファムでもお土産を買ったし、Boswellsといういつも前を通っていたおしゃれな日用品屋さんでも、木のおたまや同時に4つの時間が計れるタイマーなどを買った。これまたすっかりお馴染みSainsburyでは、イギリスに来て大好きになった「フィンガー」というお菓子をまとめ買いした。

最後に、本当にお世話になった友人へ、図書カードをプレゼントしたのだが、お二人からも逆にたくさんプレゼントをいただいてしまった。感謝感謝の中、とうとう出発の時間が来た。初春というのに、夕方になるとかなり冷えてきて、凍えるようだったことをよくおぼえている。ヒーロー空港行きのバスが来て、お二人とお別れになった。世界で一番古いという喫茶店の前を通り、オクスフォードの街並みの中、バスは進んでいった。最後という感じが全くしなかった。いつかまたここへ来られるような気がした。                      おわり

この作品を亡くなられたAおじいちゃんに捧げます

私は不安だった。彼の親戚のみなさんに、どんな顔をして会えばいいんだろう？私はまだ大学生だ。彼との年齢差もかなりある。私には病気もある。

いったい私は何をしているのだろう。私がもし彼の親だったら、親戚だったら、私をみてどう思うだろう。

それまでは、自分のことばかり考えて、結婚のことを不安になったり、決心したりしてきたが、彼と一緒にご挨拶もかねて帰省する段になり、急に、さらに異なる不安が沸いてきた。

彼は、心配要らない、と言ってくれた。Y県に行けば分かる、と何度も繰り返した。「でも・・・。」私はずっと不安だった。

Yへは青春18切符を使って行った。私はそんなに彼と長い時間いっしょにいたことはなかったので、時間がかかることは苦痛ではなくむしろ幸せだった。時刻表とにらめっこしながら、少しずつ変わっていく車窓を楽しんだ。だが、そんな旅も終わりにさしかかり、ローカル線の電車を降りて、タクシーに乗り込んだ。

昼間に出発したが、もう夜になっていた。暗い道をタクシーが慣れた感じで進んでいった。彼は嬉しそうだった。だが私はだんだん心臓がドキドキしてきて、緊張がピークに達してきていた。「着きました。」

とうとう着いた。タクシーのトランクから荷物を取り出し、道路に立った。そして大きな家に入る砂利道を歩き出した。もう後戻りはできない。私はほとんど朦朧としながら無理矢理歩いた。

「こんばんは～」

彼が扉を開けながら、明るく、ちょっと間抜けな声を出した。

「ま～、タクシーで来たの～？！電話をくれれば迎えに行ったのに～待ってたのよ～！荷物は～？疲れたでしょう、まあ遠いところを・・・」

わあわあ がやがや・・・

「とりあえず、これがおかあちゃんです。」

「まあ、これからみんなでクイズにしようとしたのに言っちゃって。」

わあわあ がやがや・・・

気がつく私は茶の間の奥の方の席に着いていた。それから、彼が親戚の皆さんに私を紹介してくれた。みなさん一人ひとり名前をおっしゃったが、失礼ながら、多すぎて一回では憶えられなかった。それから、何かの話のきっかけで彼のおじいさんと彼が話しこみだした。それで紹介タイムは実質終了となり、二人をのこしておご馳走を頂くことになった。

しばらくしておじいちゃんたちも食べ始め、おじいちゃんは私にしきりに「ゆうご」を勧めてくださった。ゆうごとは、夕顔のことで、初めて食べた。他の皆さんも、いろいろ質問してくださったり、ビデオを回してくださっていたり、それぞれのやり方で、歓迎してくださっているのだということが、少しずつ分かってきた。

私の緊張はだんだんほぐれてきた。夢の中にいるような感じがしてきた。私の中で、「親戚づきあい」「嫁姑」などなどのイメージが溶けて崩れていった。心の中にできていた氷が暖かい空気の中で消えていくようだった。子どものころの、悲しい思い出も、わだかまりも、みんな溶けていくようだった。世の中に本当にこんな世界が存在するなんて・・・さっきまで何を不安に思っていたんだろう・・・でもまだ少し信じられない・・・私はふわふわした気持ちを抱えていた。

食事の後、彼の甥のR君といっしょに、庭で花火をした。

一般的には花火を喜ぶ年頃ではないのだが、皆さん私の身長か顔から判断されたのか、当然のように嬉しそうに勧めてくださった。そして私はご判断のとおり花火が大好きで、はしゃぎまくってしまった。花火といえば、後日Tおじさんが大きな花火大会に連れて行ってくださった。私は花火大会が初めてだったのもものすごく感動した。

花火が終わると、縁側で彼のいとこであるKさんと話をした。するとkさんのお母さんであるSおばさんがコーヒーを持ってきてくださった。Kさんは、私の話を聞いた後、しきりに私を誉めてくださった。

気がつくとは彼は、茶の間で皆さん相手に熱心に何か話している。聞いていると私のことだった。徹底的に褒めちぎっていて、しかも皆さんがまた、熱心に聞き入っている。そんな、私はここにいるのに、ハズカシー！ちょっと待ってよ、そんなにすごい人間じゃないよー私は一！と言いたくても、もうどうしようもない雰囲気になっていた。

そんなこんなで、寝る時間になった。普段はおじいさんとおばあさんだけが住んでいらっしゃる家に、親戚の皆さんが大勢泊まりに来ているのだが、ご親切にも応接間を空けてもらった。みんながまた何やかやと世話を焼いてくださった。

私は夢中で彼に「すごいねー！皆さん良い人だねー！こんな世界があるなんて、すごく感動したよ・・・！」と興奮しすぎてしどろもどろになりながらしゃべった。彼のお母さんがいらっしゃって、これから大変だろうけれど、できることは協力するから、何か必要なものがあれば言ってくれたらいい、というようなご親切なお話をいろいろしてくださった。

なんて優しい方なんだろうと思った。

「あなたと結婚してよかったと改めて思ったよ。この世界を手放したくない。」

「なんだよそれ、私個人はどうでもいいって言うのか？」

彼が笑いながら言った。「だから来れば分かるって言っただろう。」

外ではY岳からくる川の流れが、心地よい音をたてていた。

## どうして結婚したの？

---

結婚していることを言うと、大抵の人が「どうして?!」と言う。私の外見が、結婚している風に見えないのかなぜなのか、逆に疑問に思ってしまうと、肝心の相手の質問にうまく答えられないことがある。

私のことをよく知っている友達の場合は、「まあ、大丈夫でしょ」あるいは「だんなさんを大切にしなきゃ駄目よ」か、どちらかの反応が多い。それから、「大変でしょう?」「幸せ?」という質問もよくある。ひとことで答えるのは非常に難しい。

もともと、以前の私は、「結婚なんてしないぞ」と思っていた。生活に対しての関心は大いにあったけれど、結婚は別だった。小さい頃から、知らず知らずのうちに、家庭や結婚に対するマイナスイメージが蓄積されていて、「私は結婚なんてしない」という風に頑なに思うようになった。だから、大きくなったらこういう生活をしよう、というビジョンはいろいろあったが、結婚については何も考えていなかった。式や、ウェディングドレスのことも何のこだわりもなかった。

いろいろあって結婚したが、今、ひとことでいうと結婚生活は楽しい。大変なこともあるが、たぶん「大変でしょう?」と聞いてくれる人の考えていることとは違うところで大変だと思う。おそらく家事のことだろうと思うのだが、家事は大変じゃない。料理はずっとやってきたし、好きなので苦にはならないし、掃除や洗濯はほとんど夫がしてくれるから。そのほかのことも大丈夫だ。

人間関係のことかもしれない。だがこれも、結婚したことで逆に良くなった。特に夫の方の親戚のみなさんに出会って、私は少し変わったと思う。今までマイナスに考えていたことを、捉えなおす事ができた。今から思えば、あんなに結婚に対してマイナスに考える必要はなかったと思う。一体何のために私は心を痛めていたのだろう。今ではさっぱり分からない。

私は大きな式をしたわけでもないし、ドレスを着たわけでもない。そうしたいとも思わなかった。だが知人が心のこもった式を取り仕切ってくれたし、その一週間後ぐらいに夫の田舎に行き、帰りに夫の実家の近くの役所へ、旅行の荷物をごろごろ引きずりながら、結婚届を出しに行った。せめてどちらかの本籍地を出すほうが、謄本を取り寄せる分のお金が浮く、と考えたからだ。結婚届を出してから、二人で「よろしくおねがいます」と言い合った。実にシンプルだったけど、私たちらしいと思った。

結婚は、人それぞれだと思う。結婚とはこういうものだなんて、一般的に言うことなどできないと思う。だから、私のようにへんなイメージを持つ必要もないと思う。

どうして結婚したのかという質問には、やはり答えるのは難しいが、私たち二人とも、お互いに「支え支えあう」関係になりたいね、ということが基本で、つきあい、結婚することになった主人も私もものすごく個性が強くて、全然似ていないのだが、そこだけは共通している。

## 恋愛と結婚

---

他の人はどうだか知らないけれど、私自身は、なんとなく、「恋愛は楽しくて結婚はしんどい」みたいなイメージをずっと持っていた。「恋愛のときは愛があって、結婚したら愛がなくなる」とか。

結婚した今となってみると、そういうイメージのせいで、しなくてもいい心配やら不安やらをたくさん抱えていたなあ、と思う。他人のせいにするわけじゃないけれど、いろいろな本やその他のメディアで、「結婚」について触れられるとき、大抵マイナスの部分を強調されることが多いと思う。その是非は問わないが、とりあえず、私は「どうして結婚したの？」に続いて、この小文で、自分にとっての「結婚」を綴っていこうと思う。マイナスのイメージからスタートしているので、逆にプラス面を主張しがちに見られるかもしれないが、出来る限りありのままの、自分自身の感想を述べようと思う。

また、結婚に関するロマンティックな面も、特に意識して書こうと思う。そうすることで、もし私のようにマイナスに傾いてしんどい思いをしている人がいたら、参考にしてもらって、バランスが取れるようになってもらえたらいいなあと思う。

楽しいのは恋愛だけ？⇒結婚していても楽しい。私は断言できる。

結婚したら愛がなくなる？⇒確かに、形が変わることはあると思う。でも、私はそれは良い意味で、だと思う。

たとえば、結婚して一緒に住んでいると、毎日一緒に過ごせる。恋愛の時には、誰だって、相手ともっとずっと一緒にいたいと思うはずだ。私だって切実にそう願った。だから結婚したようなものだ。だが、一般の結婚論の中では、この点が、結婚した途端急に逆転する。「一緒にいすぎて飽きる」「相手のいやな面がどんどん見えてくる」などなど。たしかにそういうこともあるかもしれないけれど、論理的に言って、自分の願いが叶ったのに、100%そろいもそろってマイナス感に逆転するわけがないと思う。私の場合、「ずっと一緒にいたい」という願いが叶い、嬉しい、というのが素直な感想である。

二人で何か楽しいことがあって、素敵な時間を過ごしたというとき、「また会いたいなあ」と思うとする。結婚して一緒に住んでいる場合、この願いは即座に叶う。彼への思いに焦がれなくていいのだ。特に私などは、まだ年も浅いし、熱くなりやすい。一方で、大学やら他の活動やら、やるべきこともたくさんある。そういう場合、この「焦がれなくていい」というのは、情緒的にも時間的にも大変助かる。

結婚している今でも、主人の帰りがあまり遅かったり、用事などで長い間会えなかったりすると、だんだん落ち着きがなくなってきた、最後は、ちょっと恥ずかしいけれど、少し泣いてしまうくらいになる。もちろん、一家の主婦としての、心配の気持ちもあるけれど、正直に言って、単純に「会いたい」という思いのほうが強い。いわゆる「恋しい」というやつかもしれない。

結婚する前も、この「恋しい」と言う気持ちを、エネルギーに変えて、いろいろがんばってきたが、それは苦しいことでもある。できれば、願いが叶えられるほうが良いじゃないかと私は思う。それを、スリルがないとか、刺激がないとかいう場合もあるかもしれないが、私はそんなものはいらない。ただでさえふわふわしていたり、不安になりがちな私の情緒である。また、私には病気がある。どうせなら、安心感のほうがほしい。安住ではない。安心である。

そして、ありがたいことに、主人も安心のほうが好きなタイプであるし、だから私が安心を求めるということを分かってくれていて、常に安心させてくれる。

恋愛と結婚の決定的な違いは、相手が固定されることだと思う。この固定ということに、「今決めていいのだろうか」「後でもっといい人が現れないだろうか」と思う人がたくさんいると思う。私は、主人が初恋で、そして結婚を決めた。確かに、「ひょっとしたら」と考えたことはある。主人が問題だったのではなく、むしろ自分の相手を見る眼や、決断能力に自信がなかったことのほうが大きい。一人目で決めたということに関しては、後から考えると、1人目だろうが、100人目だろうが、良い人は良い人だ。勇気を出して決断してよかったと思う。「後でもっといい人が」というのは、恋愛の場合、そう考えるとたしかにきりがないと思う。でも、私たちの場合、喧嘩しながら、ぶつかりながら、その都度乗り越えてきて、自分たち自身が進化しつづけている。「後からよくなる」のは、確かに相手を変えるというのも手

っ取り早いけれど、同じ相手でも変わっていくことはある。そしてもっと好きになる。最初、まだ結婚していなかった時に感じた愛が、決して嘘であるとかまだまだ甘かったとは言わない。でも、確かに何か形が変わってきたと思う。深まってきた、と言えるのかもしれない。

ここに、結婚する以前に私が書いた、詩とも何ともつかない文章の一部を記そうと思う。

愛するとは こんなに具体的なことなのかな。

相手が言ったことを受けて、自分のやり方を考えて、質問して、

悩んで、怒って、仲直りして。

そして生活の具体的なことを考えて。

それから てをつなごうとして勇気がでなかったり

てをつないで すごく落ち着いて安心したり

今から思えば、これは今の愛の形への第一歩だったような気がする。具体的なことから愛が育まれ深められるということは、確かにあると思う。それが結婚の素晴らしさじゃないかと思う。すてきな喫茶店で、向かい合ってお茶を飲むことだけが恋愛=楽しいことではないと思う。そんなことは、だいたい、結婚していてもやろうと思えばできる。実際することもある。でも、主人が「ただいま」といって帰ってきて、二人で夕食を囲むことだって、楽しい。良し悪しを言ったり、比べるつもりはないけれど、自分の経験の中で比較するなら、私の手料理を主人がおいしそうに食べているところをみるほうがはるかに楽しくて、幸せである。それに、飽きない。電話で、素敵な言葉をささやかれることだけが愛ではないと思う。結婚していても、たまに、喧嘩の仲直りを電話ですることにはあるが…。でも、病気でしんどき時に、そばにいて、ぎゅーってしてくれることの方が、私は嬉しい。大学生の私を一生懸命支えてくれている、その事実の方に、私は感激する。

恋愛と結婚は別々の物ではないと思う。恋愛は、英語で言うとLOVEだ。結婚の中にもLOVEはあると思う。

## 追加

犠牲になってないよ 2005年12月21日

昨日の「ガイア」は三十代独身男性について。

私が一番ショックだった言葉、それは、「結婚で何かを犠牲にしたくない」という独身女性側の意見。ふと、私が結婚した当初、周りから何度となくかけられた言葉を思い出した。「何で?」「どうして?」「大変でしょう?」

私は結婚するとき、優先順位を決める必要のあるときには、二人の生活を最優先にすると自分の中で決めた。それを犠牲と呼ぶつもりもないし、呼ばれたくもない。しかしそういう覚悟のもと、結婚しながら、大学に行ったり、バイトもしたり、友人と遊ぶし、いくつもサークル活動もしたり、ボランティアしてるし、旅行にもよく行く。イギリスにも行った。そして大学を卒業した。同時に病いと競争しながら。今も結婚しながら社会人してるし、受験生してるし、願わくば大学院生になるし、留学もする。

「二人の生活を優先する」というのは、あくまで「二人の」であって、どちらか一人のことではない。もし「二人の」という気がどうにもこうにも失せた場合、それは結婚そのものを考え直すべきだ。つまりその場合も犠牲とはなり得ない。

ま、ひょっとするとしょっちうさんの方が、いろいろ犠牲を払っているのかも知れない。住み慣れた場所も友人も親類縁者も仕事も全て置いてきて、うちのところに来てくれたし、今までず〜っとうちの事情に合わせて、とりあえずお金を稼ぐためにあんまり興味のない職種で一生懸命働いてくれているからね。でも、それも、自分で決めたことだからって言っている。

確かに大変なことが山ほどあった。半年ぐらい精神的痛手から回復できないこともあった。教育実習の 때가一番つらかったかも知れない。でも、やり遂げた時に得た、あの強烈な自信沸々感は何物にも代えがたい。自分を大切にすることと、二人の生活を大事にすること、それは矛盾しないと私は思う。

## 病気のこと

---

私は子宮内膜症という病気がある。  
ひとことで言うと、とってもお腹が痛い病気だ。  
さらに加えると、とっても気分が悪くなる病気だ。

最初は、自分にこんな病気があるなんて受け入れられなかった。  
いつも泣いていた。  
いや、痛いことが収まってくれば何でも良かった。  
しかし、進行する、今のところ明確な治療法は  
手術で取り去る以外は無い、つまり、  
そうでもない限り、治らないと、言われた。  
それが一番ショックだった。

この痛みを抱えて、一体何ができるといふんだろう、と思った。  
ほんとうに半端ではない痛みだ。  
自分の我慢の限界があるとすれば、  
その限界を乗り越え、さらに乗り越え、また乗り越える。  
神経がきりきり、ぎりぎり、ぎゅうううう、と絞られるようだ。  
頭が混乱してくる。目を白黒させてしまう。  
息が詰まってくる。腰から下が痺れてくる。

でも、まず最初に、夫から、  
この病気を「受け入れる」と言われた。  
受け入れるとはどういうことだろうか。  
それは、再び自分らしく生きる、ということだ。  
次に私が自分の病気を受け入れることができた。  
自分らしく生きるということができるようになった。

結婚。大学生活。アルバイト。  
婦人科疾患があっても大丈夫だった。  
そして今、私は新たな夢、目標に向けて  
準備中（主に「勉強」中）だ。

痛みに対して、私はずっと戦ってきた。  
競争をしていた。  
私の対策と、病気の進行と。  
しかしもう、競争は終わった。  
追い立てられることが無くなった。  
対策を講じていくのが、楽しく愉快になった。  
なんでもござれだ。  
どこまで行ってもあきらめない自信がある限り、  
勝ち負けなんてどうでも良いものになった。

「病気とうまくつきあう」

こういう言い方がよくある。

ずっと以前、私はこの言い方があまり好きではなかった。誰かから言われて、勝手に腹を立てる時もあった。

（だって、冷静に考えてみてよ。）私は思っていた。（もし、パートナーのひどい暴力に痛めつけられている人がいてよ、しんどいんです、って言ってたら、普通『うまくつきあえ』なんて言う？言わないでしょう？とにかく離れろとか、別れろとか言うじゃない？）それを、どうして病気の場合だけ、決め台詞みたいに「つきあう」って言われなければいけないんだろう。この痛みは、バットで殴られるのと同じくらい、あるいはひよっとしたらそれ以上くらいにひどいのに、しかも相手は人間と違って、時間も場所も全然選ばないし、疲れることもない、それなのに、なんでつきあえなんて言われなくちゃいけないんだろう。

私はそうやって、ぐちぐちぐちぐち悩んでいた時期があった。

まだ思いっきり混乱していた時期だった。

しかしその後で、もうそういうぐちぐちはやめようと思った。その代わりに、「病気とつきあう」ということを、私なりに具現化してみることにした。ちょっとおもしろそうだったからだ。

手始めに、私は病気に名前をつけた。「やまひ君」。ちょっと古風で、ちょっと幼っぽくて、いい感じだ。気分によって、「やまひくん」と呼んだり、「やまひのきみ」と呼んだりした。そして、私を好きで好きでたまらなくて、追いかけているという設定にした。

彼は、ちょっとやさっとでは、いなくなる。私がしょっちさんと結婚すると知って、ものすごい嫉妬をした。あの手この手で邪魔をしようとした。けれども、しょっちさんの方が強かった。...こういう風に考えると、何か私って、人気のあるすごい人みたいだと思った。

結婚してからも、彼は私の愛人？みたいな感じで、しつこくつきまとして来た。私は自分の人生が、やまひ君のせいでめっちゃめっちゃにされるような気がしたこともあった。

でも、いつのまにか、私はやまひ君のことを考えなくなった。いつの頃からか、私は本当に、「病気とうまくつきあう」ことができてきたのかも知れない。それは、大学生としての自信、アルバイトで働いてきた自信、妻として、そして主婦としての自信、人間としての自信が、少しずつ出てきたせいかも知れない。

やまひ君が、はじめにイメージしたようなものと、ひよっとしたら違うのかも知れない、そう思うようになった。あるいは、私自身が、もっと別の意味を、そこに見出すことができてきたのかも知れない。

それでもまだ私は、道の途中だ。

## 卒業に寄せて

---

2005年3月

### たくさんの感謝状

私に、この大学へ進むきっかけを下さった、みなさんへ。  
この大学を受験するとき、支えてくださった、みなさんへ。  
休学したとき、いろいろな場所で、支えてくださった、みなさんへ。  
在学中に、支えてくださった、みなさんへ。

休学したときは、つらい思いをしたこともあったけど、  
他には変え難い、いろいろな経験を積むことができたと思います。  
ご心配をおかけしましたが、無事復学しました。

こんな私だけど、実習も3回全部終わることができました。  
単位も全部取れました。免許も3件全部取得できます。  
論文も書き終わりました。

私はこの度、卒業します。  
本当に、ありがとうございました。

そして、しょっちさん。本当にありがとう。

### 図書館と本

入学したとき、在学中にこれだけはやろうと決めたこと、  
それは一年で最低百冊、図書館で資料を借りることだった。  
理由は「何となく大学生っぽい」が半分、「無料だから」が半分だった。  
振り返れば、去年までは年間約120冊ペース、去年はその倍になっていた。  
中にはあまり読まなかった本、途中で辞めた本もあるが、  
二度、三度と同じ本を借りた場合と自分で購入した場合のほとんどが  
数に入っていないので、とにかく本に触れた回数としては、自分なりには満足している。

最初は本当にただ何となくやっていて、記録のつけ方も単純だった。  
だが、お金のあまり無い生活の中で、少しずつ図書館への意識が変わっていった。

手近で、無料で、ボーッとしていても誰からも文句を言われぬ施設が、他にあるだろうか？  
自宅にテレビも無かった頃、図書館の本は私にとって、何はさておき最高のエンターテインメントであり、  
時に情報を仕入れ、教養を身につける手段であり、  
また時には、そこに問題解決の糸口や、慰めや励ましを見出す場でもあった。  
そんな中で出てきたのが、「児童文学の中の障害と死」についての興味であり、  
図書館という社会資源や読むということ（リテラシー：識字）そのものへの関心である。  
これらは今後も私のライフワークであると思っている。

## 休学とオクスフォード滞在

在学中の一番ショッキングなできごとと言え、一回生後期から二回生前期までの休学である。  
それに比べれば、今回、大学院進学を一旦あきらめ、働くことにしたことなどは、  
ものの数に入らない、と自分では思っている。

あの時は、いろいろな状況が複雑に絡み合い、まさにカオスそのものだった。  
だが、休学するからには、後で「私はこの一年間、このように過ごしました。」と、  
誇りを持って言えるような素晴らしい一年にしようと考え、実際そのとおりになった。  
今回は全くもって、前のように複雑ではない。だから、帰ってくるのは楽だと思っている。

一番ワクワクしたできごとは、イギリス・オクスフォードに行ったことである。  
私は中学生の時から、いつかイギリスに行きたい、イギリスで勉強したいと思いつけてきた。  
長い間の夢が叶う時というのは、こんなにも突然に来るものなのかと思った。  
当初、友人に会いに行くだけのつもりが、公文教室を見学したり、大学図書館を使ったり、  
シェークスピアの『冬物語』の劇を観たり、彼の故郷ストラトフォード・アポン・エイボンに小旅行したり、  
オクスフォードで一番高い場所である教会の塔に昇ったり、  
カレッジの谷間の科学博物館でアインシュタイン直筆黒板の式を書き取ったり、  
City CentreでBORDERSやBLACKWELL書店に入り浸ったり、十分すぎるくらい様々なことがあった。  
ロンドンでミュージカルを観たら、と誘ってくれた友人に対し、  
これ以上一度に夢が叶ったらその時点で人生が終わってしまいそうで怖い、  
だから後にとっておくと、本気で言ったくらいである。  
ほんの2週間足らずの滞在であったが、そういったできごとの合間には、  
普通にバスや電車に乗ったり、列車のトラブルに巻き込まれ、  
駅員さんと交渉してタクシーに相乗りしたり、  
道に迷って人にきいたり、友人たちとお茶をご一緒したり、

普通のスーパーや市場で普段の買い物をしたり、郵便を利用したり、寮つきコインランドリーで洗濯をしたり、ボタン式錠の開錠に何度も失敗して壊し、後から同じように洗濯に来た人に解決してもらったりして、何はともあれ、もしも私の夢である留学が実現した暁には、さぞかし役立つ、良いトレーニングになったと思う。

## 今後の計画

私は常々、障害児教育においては、「現場を知っている研究者」と、「研究に明るい現場の教師」の両方が必要だと思っている。ずっと、どちらになろうかと考えてきたが、今回、院への進学を中断すると決めた時、ようやく、修士は同じ大学の大学院で、博士はイギリスで修めて、研究者を目指そうと決心した。あるいはむしろ、変な話だが、すぐ院に進学しようと思っていた時より今の方が、その計画に妙にリアリティを感じるようになった。全くおかしいことだが、現実感がありすぎて、「本当に自分にそんなことができるだろうか」と足がすくむ気さえしている。

おそらく、もうこれは夢ではなくて、現実化していくプロセスの始まりだととらえているからだと思う。

休学した時と今の最大の違いは、その後のことも含めて、大勢の人に話せるということである。休学時はカオス状態だったので、戦戦兢兢、話せないこともあった。今は本当に、感謝すべき状況だと思っている。

これからも、少しずつ研究活動を続けながら、目標に向けて、焦らず、あきらめず、着実に進んでいこうと思う。

### さぬきほっちオリジナルの料理集

調味料にはこだわり、あとは旬の安くて新鮮な材料をいろいろ組み合わせて使う、というのがさぬき流です。

登場する「ごま油」は香りがきつくない、さっぱりとしたものです。

(もしこのレシピを試して頂ける場合は、お好みに応じてほかの油でももちろんOKです。)  
そのほか塩、砂糖、酢、醤油、味噌もこだわっています。  
とってそんなに高価なものでもありません。  
でも、調味料がいいと、料理の味に失敗がありません。  
私も、結婚してこのやりかたにしてから、自分がすごく料理上手になったような錯覚を覚えました。

### 本格！サルチャのシチュー

材料 塩 チキンブイヨン（好みで） たまねぎ キャベツ にんじん

じゃがいも サルチャ（トルコのトマトペースト。なければ普通のトマトペーストで）

圧力鍋に入る分量を適応調整する

たまねぎは薄い半月切りをさらに横半分にする。

キャベツは乱切り、にんじん、じゃがいもは回し切り。

圧力鍋に、たまねぎ、キャベツ、切って塩をしたにんじん、じゃがいもの順に入れる。

塩、チキンブイヨン、サルチャ、そしてひたひたよりちょっと少な目の水を入れる。

キャベツの分、後で水分が大幅に増えることを注意。

圧力鍋の場合は、最初に調味料を入れてしまうので、味付けは

薄めにするのがポイント。薄くても煮てから後で足せるが、辛いとどうしようもない。

ふたをして、おもりをセットし、中火にかける。

沸騰してしばらくしたら火を消して余熱で調理。

圧力が取れたら、おもりを外し、ふたをあけ、中をかき回して、またちょっと煮て出来上がり！

### いわしの青海苔炒め揚げ

中サイズのいわしを3枚におろします。この時、まな板の上に新聞紙などの適当な紙を敷くと、あとの処理が簡単です。

いわしをよーく洗ったあと、（いわし七度洗えば鯛の味 です。）塩と青海苔をまんべんなくまぶします。

多めの油で炒め揚げにします。

いわしはにおいも気になりがちですが、このメニューは青海苔の香りが広がっておいしいで

すよ！

### 豆苗のかんたんオムレツ

豆苗（とうみょう）の歯ごたえが絶妙！

豆苗一束を3センチぐらいの長さに切って、（フライパンで）ごま油で炒めます。炒まったら塩で味付けし、人数分×1，5個の割ほぐした卵を流し込みます。表がぶつぶつとしてきたら、フライ返しでひっくり返して裏もよく焼きます。よーく焼くのがポイントです。焼けたらお皿にそのままとり、お好みによりケチャップをかけて。かんたんですがおいしいです。

### たましい元気なみそいため

「たま」ねぎ、「しい」たけ、「元気なみそ（商品名）」の炒め物。そのまんまですが、おいしい組み合わせです。

たまねぎをスライスして、ごま油で炒め、しいたけを加え、炒まったら塩とおみそと少量のおみそで味付け。

なんともいえない香ばしい香りがします。

### 白菜のしょうが風味卵とじ

これは、多分いろいろな方が、詳細は少しづつ違って使われているやりかただと思います。

私の主人が白菜もしょうがも大好きなので、冬によく作るメニューです。

白菜をごま油で炒め、しなっとしたら塩少々、とき卵を加えます。仕上げにすりおろししょうがをお好みに応じて加えます。

香川にいる友だちのところに遊びに行った時だった。高速バスで行ったのだが、車窓に時々現れる、「セルフ」の看板に疑問をもった。あれは何のことか？

あとで分かったことだが、「セルフ」とは **うどん** のセルフサービスの店のことだった。さぬきうどんでは有名なさぬき地方独特のスタイルなのだろうか、まだ食べたことのない私は想像した。

友だちの家についた後、おすすめのさぬきうどんの店に連れて行ってもらった。「さぬきうどん食べたら、他のうどんは食べられなくなるよー。」と友だち。

お目当ての店は、友だちの家から車で30分ほどのところにあった。一見普通の民家なのだが、なかに入ると、こじんまりとしたお店だった。いかにも穴場という感じだ。友だちのおすすめメニューは「ぶっかけ」だということで、「ぶっかけ…」と少し緊張しながらお店の人に言う。

**どん!** と出てきたのはまさに、うどんにつゆをぶっかけただけの、シンプル極まりない代物。それに、生姜や天かす、すりごまなどを自分でかける。みようみまねで、なんとかやってみたものの、味はどうなんだろうとちょっと不安になる。

ひとくち食べて・・・す、すごい歯ごたえ！麺につやがあって、噛むとこしが非常に強い。まるでゴムのようだ。それからつゆのうまみ。少量でも十分いける。いままで食べてきたうどんのつゆとは違う、深い味わい。冷たいのど越しがたまらなく爽快だ。これはおいしい！体にもよさそうだ。

友だちによると、さぬきうどんのつゆは、かつおと昆布といりこの3段重ねだそう。なるほど、うまみが強いわけだ。

それからというものの、私はすっかりさぬきうどんのファンになった。

## 梅ジュースをつくろう

---

**梅入手** さぬきほっち御用達、近所の食品館Kで、梅を1kg入手。品種は「古城」運のいいことに、安売りしていて普段の半額。真緑ではなく、うっすら黄色くなりかけている。梅ジュースには適しているだろう。

砂糖もNで甜菜糖を、普段使いの分も合わせて500gを3袋入手。

**下準備** 帰宅して早速梅を洗う。甘い、優しいいい香り！恥ずかしながら、梅がこんなにいい香りだとは知らなかった。梅のお臍も全部取る。水分をふき取った後、冷凍庫へ。24時間入れる。

**仕込み** 24時間後、広口ビンを洗って乾かし、梅1kgと砂糖500gを交互に入れていく。

レシピでは梅2kgに砂糖1.8kgとあるが、お好みで砂糖の量を加減するとのこと。500gでもけっこうたっぷりした感じがあった。ビンのふたを閉めて、仕込み完了！

**一日目** 今日食品館Kに行ったら、なんと「南高梅」が出ていた。それはともかく一日経過。梅がちょっとしわしわになっている。

**二日目** 少しエキスが出てきている！どうやら失敗ではないらしい。砂糖もかなり溶けかかっている。

**三日目** 下のほうは完全にジュース状態。もう砂糖も原型をとどめていない。ジュースのなかに梅がごろごろしているという状態。今日八百屋Uに行ったら、梅を量り売りしていた。

**四日目** 昨日と同じく。明確にジュースの量が増えている。どんな味なんだろう？楽しみだ。（ちょっと気が早い？）

**五日目** ジュースの量が増える以外は変化なし。  
同時に下のほうのどろどろの砂糖がどんどんジュース化していつている。

～ 早送り ～

**十日目** とうとう全ての砂糖が溶けた。完成！！

## 試飲

梅ジュースを別の瓶に移し変えて、早速水で割って飲んでみる。

うーん、さわやか梅風味～！大体3倍から4倍にして、氷を浮かべる。  
砂糖を少なめにしたのに、結構甘い。

## そして新たなる挑戦・・・

次は「南高」梅で挑戦。分量も倍の2kgで。

6/8漬け込み開始。

こちらもおいしくできあがりました！！

## 「豆腐も、湯葉も出来る豆乳」

キャッチコピーにつられて、ふとその豆乳を買った。

以前、ある豆腐専門店で、湯葉の手作り体験をしてから、いつか家で湯葉を作るんだ！と思っていた。

とうとうチャンスがやってきたのだ。

しかし！主人は、豆腐、湯葉は好きでも、豆乳は苦手。

つまり、**失敗は許されない**。専門店でやったときの記憶だけが頼りだ。

一大決心をして、平たい鍋に豆乳を全部（1L）あける。

そしてそろそろと温める。

しばらくして…

やった！**湯葉らしきもの**が浮上してきた。

しかし、すくうのは一苦勞。やわらかいので、すぐ豆乳に混じってしまう。

何回かするうちに慣れてくる。獲物を狙う鷹のような気分。

たくさん取ったが、市販の湯葉の様子とはだいぶ違う。

少し冷ました後、湯葉サラダにして食べた。

甘味があって、こくがあって、おいしかった。

問題は残った豆乳だ。

考えたすえ、トルコのサルチャと、おろした生姜を加えて、

トマトスープにする。

なかなかいけた。

豆乳が苦手な主人にも好評だった。

専門店では、できあがった湯葉に、少量のすった柚子の皮と、生姜を加え、

軽く醤油をたらして「つけ」にしていた。

今度はそれをやってもいいかな、と思う。

## 本の紹介ー料理

---

私がつくったお料理どうぞ（指導 石原洋子 婦人の友社）

料理のビギナーにぴったり。基礎から説明してくれる。  
綴じ方がリング形式になっていてとても使いやすい本。

私が作ったお菓子をどうぞ（指導 石原洋子 婦人の友社）

上記の本の姉妹本。難易度が3段階に表示されていて便利。  
おいしい紅茶の入れ方、ラッピングの仕方なども。

料理上手は味つけ上手（本谷滋子 婦人の友社）

煮物 汁もの 和えもの ご飯 メインディッシュをひとつの鍋で  
おもてなしとおせち など少しレベルアップ。

今日も笑顔で台所 あせらず力まず子育て料理（本谷恵津子 婦人の友社）

上記の本と比べて洋風のものが多い。「本当にかんたんなおやつ」など読む人を惹きつけるテーマ満載。

まとめづくりとフリージングでやっぱりお昼はおべんとう（婦人の友社編）

いろいろなお弁当の本はあるけれど、この本は決定版。知識もレシピもばっちり。

忙しいあなたのホームフリージング（婦人の友社編）

上記の本のフリージングとはなんぞやと思われた方へ。

魔法使いの台所（婦人の友社編）

同じく、まとめ作りとはなんぞやと思われた方へ。料理のイメージガラッと変わる！

オーガニック・クッキング（柴田書店編）

季節ごとにオーガニックレストランが担当している、おしゃれな野菜料理145。

正食野菜料理百科（岡田昭子 正食出版）

野菜料理といえばこれ。料理のほかに野菜の説明が載っている。

おやつレッスン（岡田昭子 正食出版）

体にやさしいおやつのつくりかた。

マクロビオティックガイドブック（日本CI協会・正食協会 共著）

ただ料理、ではなくて、食養法としての料理を考えて見たい人への入門書

### チーズ図鑑 **Encyclopedie des Fromages**

文芸春秋 編 増井和子、山田友子、本間るみ子 文 丸山洋平 写真

文字通りの「チーズ百科」。435種889個のチーズを写真と詳細なデータで紹介。

カマンベールチーズ好きの私にはたまらない一冊です。

### フランス菓子のおいしさの秘密 吉田菊次郎 草思社

腕利きの菓子職人が豊富な知識と経験をふまえて描いたフランス菓子の秘密。

時々出てくる漢文調の表現が不思議。

鏡の中、神秘の国へ ヨースタイン・ゴルデル著 池田香代子訳 NHK出版

主人公ファシリエと、天使アリエルの会話がほとんどを占めるこのお話。

哲学の本として読むこともできると思います。著者を考えるとその方が正しいのかも知れません。

でも、子どもの末期患者の物語として捉えてしまった私にとって、非常に衝撃的なシーンがありました。それがラストです。

いわゆるこの手の話ではお決まりのことが、この物語には無いのです。

電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ すずらんの会編 角川書店

長野県立こども病院の院内学級の子どもたちの言葉（主に詩）と絵。

私はこの本が、ある病院へ訪問授業の手伝いで行った時の思い出と重なりました。

新しく入院してきた女の子に、一人の女の子が話しかけていました。

静かな静かな会話でした。

あの静かさの奥にあるものが、形になっている、

それがこの本の詩なのではないかなと思います。

ハートソング    H e a r t s o n g s    マティ・ステパネク    廣瀬裕子訳    P H P 研究所

すてきなすてきな世界のため    マティ・ステパネク    廣瀬裕子訳    P H P 研究所

ホープ・スルー・ハートソング    マティ・ステパネク    廣瀬裕子訳    P H P 研究所

「作家、平和を広める人、そして父親になる」

これが、一連の詩集の作者マティ・ステパネクさんの夢。

すてきだなあとします。

3才の時、筋ジストロフィーで一つ年上の兄を亡くしたことをきっかけに、

詩を始めたという彼。自身も同じ病气。

病气や生や死、平和、自然、神への感謝など、目をそらさずに見つめ、

またはっきりと言ってのける力強さがすてきです。

種まく子供たち 小児ガンを体験した七人の物語 佐藤律子 編 ポプラ社

有名人の、おもしろおかしくもあり、もの悲しくもある辞世の句・言葉なんてものがありますが、  
この本の「ミニバラ色の種」の中の、最期の言葉は、  
すごく「強さ」というものを感じました。  
いつか私も、そんなふう生きて、言ってみたい言葉です。  
「種」という発想が、フィリツのページの「芽」に似ていることから、お気に入りの一冊です。

私の「死への準備教育」 大町公 法律文化社

同名の講義のテキストでした。「死」のことを考える、「死」についての教育とは。  
後半は悲しみとの融和「グリーフワーク」についても。  
豊富な参考文献には関連して学べる本が多数。  
後に、講義の内容を含んだ  
受け容れる、老いと死と悲しみと 大町 公 法律文化社 が出版されています。

新版 愛、深き淵より 星野富弘 立風書房

上記の講義で取り上げられた本。著者が、事故で首から下が動かなくなるという、  
自分の世界そのものが壊れてしまうような出来事から、口で絵を描くということを通して、  
あたらしく世界をつくりあげていく過程。 とにかく絵が素敵です。

心理学ワールド入門 桜井茂男 編著 福村出版

大学の講義のテキストでした。心理学の入門書。いろいろな心理学の紹介がされていて、  
分かりやすい本です。

信頼感の発達心理学 思春期から老年期に至るまで 天貝由美子 新曜社

著者は上記「ワールド入門」の共著者。  
他人を信じられる、信じられない、自分を信じられる、信じられない。信頼感って、自信って

？

傷ついてしまった信頼感があるとすれば、それはどうやって回復できるのか？  
幼児期の信頼感の発達の章も追加されました。

未来分析 健全に苦悩するために 守屋國光 ナカニシヤ出版

「未来へ投錨し、そこを光源として  
そこから今の自分を投射してみよ」 帯より  
未来がもつクリーンエネルギーを活用した生き方とは？  
過去を分析する精神分析に対して、未来を重視する「発達人間学」の書。

講座サイコセラピー8 交流分析 杉田峰康 日本文化化学社

コミュニケーションという言葉がよく言われるようになりました。  
人間の他との交流の仕方を分析して、より良いコミュニケーションを目指す「交流分析」の本  
。

メタ-カウンセリング入門1 傾聴法 藤川秀夫 野口新子 共著 CTC

メタ-カウンセリングは、カウンセリングを越えたカウンセリングという意味で、精神的経済的  
に  
自立している比較的健康な人を対象にしたもので、カウンセリングとは少し違うそうです。  
その分、日常生活に役立つ「聴く」技術が学べます。

ブッタとシッタカブッタ 小泉吉宏 メディアファクトリー

「心の運転マニュアル本」心をテーマにしたユニークな漫画本。  
絵と文章を巧みに使って、心のことを考えていきます。

そのまんまでいいよ 小泉吉宏 メディアファクトリー

ブッタとシッタカブッタ2。「こんなものを見方をしたら、こころはもっと楽になる」  
病気になる、大学も休学し、自分を見失いそうだったとき、当時「彼」だった主人に薦められ  
た本。

シリーズ3は「なあんでもないよ」です。

## 本の紹介—論文執筆

---

<論文執筆や研究活動におすすめの本>

『論文の書き方』 澤田昭夫 講談社学術文庫

- ★論文を書くとは、研究とは、如何なることか？がよく分かります。  
この本に出てくるように、文献カードと研究カードを使えば論文が書けた！  
この本に出会っていなければ、今の私は無いと思います。

『論文のレトリック』 澤田昭夫 講談社学術文庫

- ★上記の本の続編。

『考えるシート』 山田ズーニー 講談社

- ★考えることを考える、画期的な本。今すぐヒントがほしい人向けな感じの分かりやすい本。

『おとなの小論文教室』 山田ズーニー 河出書房出版

『理解という名の愛がほしい』 山田ズーニー 河出書房出版

- ★アウトプットすることに勇気が出てくる。

『博士号への道』 榊原正幸 同文館出版

- ★博士号が取れない条件から逆説的に述べてあるところに納得。

『海馬：脳は疲れない』 池谷裕二・糸井重里 新潮文庫

- ★もうあかん～と思ったときに。

<おすすめのソフトウェア>

玉手帖（玉手帖**Basic Ver.1.0 for WinXP**）

★執筆支援ソフト。私はこれを使って、

上記『論文の書き方』の考え方の「研究カード」をデジタル化しています。

文想 (by 文想工房)

★河童ペンギンのキャラクターもすてきな、ウィンドウズ用文献管理ソフト。  
フリーソフトウェア。

2001年8月以降、2006年9月現在まで、サイトで確認できる限り新たな更新等はされて  
いないようですが、

文想バージョン3.651は、十分すごいソフトです。

## 本の紹介ーおはなし

---

ビッビ・ボッケンのふしぎ図書館 ヨースタイン・ゴルデル クラウス・ハーゲルupp 稲苗代  
英徳 訳

### **Bibbi Bokkens magiske bibliotek**

元は、ノルウェーにおける「図書年」（1993年）のイベントの一環として、  
全国の6年生に無料配布するために限定出版された本。

楽しみながら本の世界を体験学習できる、スリリングな物語で、  
思いのほか好評だったため、別の出版社が版權を買い取って再販、  
広く読まれるようになったそう。

確かに、私の「学校図書館司書教諭」の講義テキストに匹敵するくらい、  
本や図書館のことについて学べるし、しかもめちゃうちゃおもしろい！

「いかにも」感は全くありません。

心をこめて、このフィリツ図書館の第1冊目に配置したいと思います！

### むだに過ごしたときの島 **L'isola del tempo perso**

シルヴァーナ・ガンドルフィ 泉典子 訳 世界文化社

なんたって、このタイトルが良いですね。

私はよく、「ああ、時間を無駄にしてしまった」とか、「あれもしなきゃ、これもしなきゃ」  
とか、

自分で自分を追い詰めたりするのですが...一瞬にして惹きつけられた作品です。

作者はイタリアの方ですが、意外なところで日本という言葉が出てきます。

### 大きい1年生と小さな2年生 古田足日 偕成社

アルバイト先の学習教室の教材で使われているので、気になって全部読んだ作品。

私も「小さい」ので小さな2年生あきよの気持ちがよく分かる。

児童文学だけれど、大人にも通じる示唆を含んでいると思う。

### 少女ポリアンナ エレノア・ポーター/菊島伊久栄 訳 偕成社文庫

赤毛のアンに少し似ている。どちらが先かは、年代を調べていないので分からない。

そんなことはともかく、こちらも読みやすいがいろいろと考えさせられる本。

### 赤毛のアン 完訳クラシック赤毛のアン L. Mモンゴメリー 掛川恭子 訳 講談社

アンシリーズは10巻までであるが、今までなぜか7巻までしか読んだことがない。

小さいころ、心の支えにしていたほど大好きなシリーズ。

人生のいろいろな場面にそれぞれ対応したアンがいる。

この講談社の完訳クラシック版が一番好き。

あしながおじさん ジーン・ウェブスター

この本も、本当にたくさんの訳がでています。原典の方も大のお気に入りです。

私はこの本に憧れて、小さい頃、自分も大学で勉強したいなあと思うようになりました。

また、原典の方の主人公の話し方が、楽天的な調子が、私と似ている気がして、

読んでいる途中で思わず吹き出してしまったこともあります。

ハリーポッターと賢者の石

ハリーポッターと秘密の部屋

ハリーポッターとアズカバンの囚人

ハリーポッターと炎のゴブレット

ホグワーツ校指定教科書Ⅰ 幻の動物とその生息地

ホグワーツ校指定教科書Ⅱ キィディッチ今昔

(以上 J・Kローリング作 松岡祐子訳 静山社)

最初にこのシリーズが流行り出した頃、「わたしゃ絶対読まないぞ！」と意地を張っていた。

日本語版の活字の字体の変化が、どうしても受けつけられなかった。

2年ほど経ったある日、それでも読み始め、いつのまにか大好きになっていた。

「アズカバンの囚人」が一番好き。

キャプテンはつらいぜ 後藤竜二 講談社

キャプテン らくにいこうぜ

キャプテン がんばる

「麦塾」に通う野球少年の話。「あっそう」とおっしゃらないで。

麦塾とは？なぜ「キャプテンはつらい」のか？

このシリーズには、とてもひとことでは言い表せないおもしろさがあります。

子どもだましでは無い、本当の童話です。

クリスマスキャロル ディケンズ 脇 明子 岩波少年文庫

この本を読むとお腹が空く。

しかし、主人公のことを深く考えると、とても切ない話。彼を「悪者」とは言えない。

それでも、底抜けに明るいハッピーエンド。でも現実には、...と考え出すと止まらない。

## filizエッセイ集

<http://p.booklog.jp/book/36584>

著者：さぬきほっち

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanukihottea/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36584>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36584>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.